

# 日本書紀出典考

—— 対表現をめぐって ——

榎 本 福 寿

## 一

管子曰、黃帝立明堂之議<sup>者</sup>、上觀<sup>ニ</sup>於賢<sup>一</sup>也。  
堯有<sup>ニ</sup>衢室之問<sup>一</sup>者、下聽<sup>ニ</sup>於民<sup>一</sup>也。舜有<sup>ニ</sup>告善  
之旌<sup>一</sup>、而主不<sup>レ</sup>弊也。禹立<sup>ニ</sup>建鼓於朝<sup>一</sup>、而備<sup>ニ</sup>  
訊望<sup>一</sup>也。湯有<sup>ニ</sup>總術之庭<sup>一</sup>、以觀<sup>ニ</sup>民非<sup>一</sup>也。武  
王有<sup>ニ</sup>靈臺之<sup>有</sup><sup>一</sup>、而賢者進也。此故聖帝明王  
所<sup>ニ</sup>以有而勿<sup>レ</sup>失、得而勿<sup>レ</sup>亡也。 (孝德紀大  
化二年二月条)

管子曰、黃帝立明臺<sup>(堂)</sup>之議<sup>(議)</sup>者、上觀<sup>ニ</sup>於兵<sup>一</sup>也。  
堯有<sup>ニ</sup>衢室之問<sup>一</sup>者、下聽<sup>ニ</sup>於民<sup>一</sup>也。舜有<sup>ニ</sup>告善  
文旌<sup>(帛)</sup>、而主不<sup>レ</sup>蔽也。禹立<sup>ニ</sup>建鼓<sup>(鼓)</sup>於朝<sup>一</sup>、而備<sup>ニ</sup>  
訴訟<sup>(訟)</sup>也。湯有<sup>ニ</sup>總術之庭<sup>一</sup>、以觀<sup>ニ</sup>民非<sup>一</sup>也。武  
王有<sup>ニ</sup>靈臺之<sup>有</sup><sup>(宮)</sup><sup>一</sup>、而賢者進也。此古聖帝明王  
所<sup>ニ</sup>以有而勿<sup>レ</sup>失、得而勿<sup>レ</sup>忘也。<sup>(止)</sup> (魏志文帝  
紀第二裴松之の注。括弧内は、裴松之注と異  
なる芸文類聚卷十一帝王部総載帝王の語で、  
その×は該当字を欠く印。)

右の上段に掲げた日本書紀（以下、これを書紀と略称する）の一節と下段の三国志・魏書の裴松之注や芸文類聚などの文とは、表現の細かな点に至るまで互いに相近い。その近き故に、ひとたび書紀の出典を特定することになると、掲出した限りでは、いずれとも速断しがたい。魏志の裴松之の注と芸文類聚との「類似率は半々で大差なく、どこちらに出典があるかわからない。」（小鳥憲之著『上代日本文学与中国文学』上348頁）というのが実状であろう。結局、書紀の引用した箇所直前に「皆所<sub>レ</sub>以廣詢<sub>于</sub>下<sub>一</sub>也」とあり、これが魏志の本文に一致し、件の裴松之注はこれに付されているという理由で「述作者はこの注本の三国志によったことがわかる」（同前349頁）と判定される。とはいえ、小島先生が「なお芸文類聚の本文をも参照したのであろうか。」と疑いを残されている通り、芸文類聚とのかかわりはなお否定しきれない。<sup>(1)</sup>

暫く助辞の類を除外して、本文の語の異同を書紀・裴松之注・芸文類聚の三書について対照させてみると、

書 紀			
堂	賢	建	訊望
裴松之注	臺	兵	建
芸文類聚	堂	賢	諫
		訊	訟
		宮	忘
		止	

右表が示す通り、その書紀との「堂」「賢」「訊」などの一致ないし類似は、芸文類聚が参照されたとみる見方を支持するであろうが、一方でそれは、実質的な意味をになう語に限る限り、魏志の裴松之注の文も書紀において選択的に利用されたその一つの素材でしかなかったのではないかと思わせる。

ところが、留保しておいた助辞については、芸文類聚の影響は全く認められない。試みに句中と句末の助辞を「賢者進也」までの文中から抜き出し、助辞以外の本文をその文字数に応じて数字で表わして、三書の関係をみる

に、

黃帝

堯

舜

禹

湯

武王

書紀……7者4也。6者4也。6而3也。6以3也。7而3也。

裴松之注……7者4也。6者4也。6而3也。6以3也。7而3也。

芸文類聚……7、4也。6、4也。6而3也。6而2也。6、3也。7、3也。

書紀と裴松之注とは完全な一致をみる。書紀の出典が裴松之の注であったことの有力な証左となるであろうが、ここでは整然とした対句の構成が貫かれている。芸文類聚は、「舜」「禹」に句中の助辞をもち、他にはそれが無く、なかならず「禹」の部分において字数の乱れがある。

実質的な意味をになう語を他によって置き替えるという選択的な利用を行ないながら、その一方で、助辞を含む文の基本的ななく組については、裴松之注を全面的に襲っているのである。取捨選択の余地があったことに照して、かたくななその襲用は意図以外のなものでもない。たとえば芸文類聚の「評」によりながらもなお「訊望」に作り他の対句に歩調を合わせているなどに窺われるように、裴松之注の文が則る対に基づく表現を書紀もまた自らの表現の基礎に据えていた、恐らくそのために全面的な襲用が意図されたのであろう。またたとえば、掲出した文章末尾にあって二書ともに相異なる「忘」「止」のいずれにも依らずに、

書紀……有而勿<sup>しつず</sup>失、得而勿<sup>ぼうず</sup>レ亡

裴松之注……、得而勿<sup>レ</sup>忘

芸文類聚……、得而勿<sup>レ</sup>止

書紀が別途に作る「亡」が「忘」と関連するにしても、「亡」であれば、上句との類義的な対応は一見して明らか

であろう。表現の上で上句との対応が考慮されていたことは疑いない。基本的なわく組を何れに求めるか、そうした自らの表現に利用する出典文の選定を始め、その改変まで、いずれにも対的な表現への志向が大きくかわつていたとみることができると。

従来、書紀の出典が論じられる場合に、原文との関係をめぐって、おおむね、単なる一致ないしは類似の指摘か、あるいは書紀がいかに原文を利用しているのか、その解明などに留まっていなかっただろうか。利用状況の解明をめざすにしても、原文との一致に焦点が置かれ、従ってどこまでも個別的な問題として取りあげられているに過ぎない。個別例の解明がやがて一般化され、表現論ないし構文論として体系的にまとめられていないそうした従来の出典論に対する反省から、小稿では、原文との一致ならぬ相違について考える。漢籍を自らの表現に利用するに際していかなる力が働いて原文との間に相違が生じてくるのか、その力とそれが働いた結果としての異なりとは、まさに書紀の個性とみなし得るであろう。その個性とは、上掲孝徳紀の一例に窺われるように、対表現として析出できる。以下、史書・文選・芸文類聚などの主な出典例を取りあげ、右の観点に立つて考察を試みる。<sup>4)</sup>

## 二

### (一) 史書

はじめに、挙例に先立って、予め除外する用例について前置きしなければならない。その用例とは、書紀の文と依拠した原文との異なりが双方に個有の文脈(内容)にかかわる場合、たとえば固有名詞の人名・地名など、あるいは官職・制度さらには状況などが違い、原文のままでは利用不能のために改められた例がほぼ該当する。このいわば必然的な異なりの用例は、表現の問題とは異質である。従って特に注意すべきもの以外は、そうした用例には

触れていない。

まず史書を取りあげるが、前の魏志裴松之注の文ではその構成が整然とした対表現を基本としていた、恐らくそのためであろうが、書紀における改変は一部に過ぎない。同じように対表現を基本としても、梁書・王僧弁伝の一節に対しては、それを出典として利用した欽明紀の一文において、対表現にかかわって次のような改変が加えられている。

新羅西羌小醜、逆天無狀。違我恩義、破我官家。毒害我黎民、誅殘我郡縣。我氣長足姬尊、靈聖聰明、周行天下。劬勞群庶、饗育萬民。哀新羅所窮見歸、全新羅王將戮之首。授新羅要害之地、崇新羅非次之榮。我氣長足姬尊、於新羅何薄、我百姓、於新羅何怨。而新羅、長戟強弩、凌蹙任那、距牙鉤爪、殘虐含靈。刳肝斷趾、不厭其快、曝骨焚屍、不謂其酷。任那族姓、百姓以還、窮刀極俎、既屠且膾。豈有率土之賓、謂爲主臣、乍食人之末、飲人之水、熟忍聞此、而不悼心。況乎太子大臣、處跌蓐之親、泣血銜怨之寄、

賊臣侯景、凶羯小胡、逆天無狀、 $\wedge$ 甲 $\vee$ 。違背我恩義、破掠我國家。毒害我生民、移毀我社廟。我高祖武皇帝、靈聖聰明、光宅天下。劬勞兆庶、亭育萬民。 $\wedge$ 乙 $\vee$ 。哀景以窮見歸、全景將戮之首。置景要害之地、崇景非次之榮。我高祖、於景何薄、我百姓、於景何怨。而景、長戟強弩、陵蹙朝廷、鋸牙郊甸、殘食含靈。刳肝斷趾、不厭其快、曝骨焚尸、不謂爲酷。 $\wedge$ 丙 $\vee$ 、總功以還、窮刀極俎、既屠且膾。豈有率土之賓、謂爲主臣、食人之末、飲人之水、忍聞此痛、而不悼心。況臣僧辯、臣霸先等、 $\wedge$ 丁 $\vee$ 、泣血銜哀之寄、

當ニ蕃屏之任一、靡<sup>レ</sup>頂至<sup>レ</sup>踵之恩。世受<sup>ニ</sup>前朝之德一、身當<sup>ニ</sup>後代之位一。而不<sup>レ</sup>能<sup>下</sup>瀝<sup>レ</sup>膽抽<sup>レ</sup>腸、共誅<sup>ニ</sup>奸逆一、雪<sup>ニ</sup>天地之痛酷一、報<sup>中</sup>君父之仇讎<sup>上</sup>、(欽明紀二十三年六月条)

摩<sup>レ</sup>頂至<sup>レ</sup>足之恩。世受<sup>ニ</sup>先朝之德一、身當<sup>ニ</sup>將帥之任一。而不<sup>レ</sup>能<sup>下</sup>瀝<sup>レ</sup>膽抽<sup>レ</sup>腸、共誅<sup>ニ</sup>姦逆一、雪<sup>ニ</sup>天地之痛一、報<sup>中</sup>君父之仇<sup>上</sup>、(梁書・列伝第三十九王僧弁)

(一)長戟強弩

(1)長戟彊弩

(二)距牙鉤爪

(2)鉤<sup>ニ</sup>牙<sup>ニ</sup>郊<sup>ニ</sup>甸一

(三)不<sup>レ</sup>厭<sup>ニ</sup>其快一

(3)不<sup>レ</sup>厭<sup>ニ</sup>其快一

(四)不<sup>レ</sup>謂<sup>ニ</sup>其酷一

(4)不<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>酷

(五)泣<sup>レ</sup>血銜<sup>レ</sup>怨之寄

(5)泣<sup>レ</sup>血銜<sup>レ</sup>哀之寄

(六)摩<sup>レ</sup>頂至<sup>レ</sup>踵之恩

(6)摩<sup>レ</sup>頂至<sup>レ</sup>足之恩

(七)世受<sup>ニ</sup>前朝之德一

(7)世受<sup>ニ</sup>先朝之德一

(八)身當<sup>ニ</sup>後代之位一

(8)身當<sup>ニ</sup>將帥之任一

上段に列挙した通り、書紀では、(一)の「長戟・彊弩」に対応させて(二)に「距<sup>(7)</sup>牙・鉤爪<sup>まがれるつめ</sup>」とし、(三)の「其快」との対応上、(四)では原文「爲<sup>レ</sup>酷」を「其酷」に変え、(五)において「泣<sup>レ</sup>血」との関係から「銜<sup>レ</sup>哀」より重い内容の「銜<sup>レ</sup>怨」に改変し、またそれと同様に、(六)では「頂<sup>いただきのうへ</sup>」と対応させるべく原文の「足」を「踵<sup>くびす</sup>」に改める。(七)(八)の改変は、両者の表現上の逐語的な対応をめざしたものに外ならない。

右の改変とは別の、とはいえ広くはその中に包括し得る原文に対する付加や削除の場合でも、

違<sub>二</sub>背我恩義<sub>一</sub> ↓ 違<sub>二</sub>我 恩義<sub>一</sub>

破<sub>二</sub>掠我國家<sub>一</sub> ↓ 破<sub>二</sub>我 官 家<sub>一</sub>

雪<sub>二</sub>天地之痛<sub>一</sub> ↓ 雪<sub>二</sub>天地之痛酷<sub>一</sub>

報<sub>二</sub>君父之仇<sub>一</sub> ↓ 報<sub>二</sub>君父之仇讎<sub>一</sub>

対表現という基本構造は崩していない。むしろ四字句・六字句に改めるそうした志向は、それが駢儷文の基本であることから、対表現に対する細心な用意を窺わせるであろう。それは、後述するように、表現を飾るいわゆる文飾と無縁ではない。

ところで書紀において削除された原文をみるに、そのまず梁書本文中に付した△乙▽△丙▽△丁▽には、それぞれ次の語句や文があてはまる。

△乙▽ 如我考妣、五十所載。

△丙▽ 高祖非食卑宮、春秋九十、屈志凝威、憤終賊手。大行皇帝溫嚴恭默、不守鴻名、於景何有、復加忍毒。

皇枝纒抱已上、

△丁▽ 荷稱國藩湘東王臣釋、

それぞれ「考妣」「高祖」「大行皇帝」「湘東王」「釋」などの固有の事跡を内容としていて、それらが欽明紀の当該詔文に企図する内容にそぐわない、そのための改変も著しく困難あるいは不可能な部分として削除されたものであるが、しかしながら、この削除例は、固有名詞などや、さらには左記の、

國家 ↓ 官家      社廟 ↓ 郡縣      朝廷 ↓ 任那

背景となる地が朝鮮半島であるために改めたり、さらにはその主語が神功皇后なるが故に「光宅天下」を「周

行天下」へと改める場合などのいわば改変例と、内容にかかわる止むを得ない処理という点では一つに括り得る。

一方、原文に「構<sub>二</sub>造姦惡<sub>一</sub>」とある△甲▽については、書紀に削除されているその理由を、そうした内容とのかわりに求めることができない。原文では「逆<sub>レ</sub>天無<sub>レ</sub>狀」に続き、これと対になっている。対の先行する一方が利用されている以上、またそれとほぼ類義的であつて、従つて固有の事跡に限定的な内容ではないことから、その削除の理由は△乙▽以下とは別になければならないが、欽明紀の詔文では、

新羅、西羌・小醜、逆天・無狀

右のように二字づつまとまる、しかも類義的な内容の語が組となつて、整然とした対句を構成しているのである。この対句に対して、さらに別の対句が二組以下に続くといった構成を取る關係上「構<sub>二</sub>造姦惡<sub>一</sub>」は遊離し、このために、つまり対句から外れるがために削除されたと考へて恐らくは誤りない。もともと「凶羯小胡」に基づき、「逆<sub>レ</sub>天無<sub>レ</sub>狀」との対応から「西羌小醜」が案出されたのであるが、その外ならぬ対表現への強い志向が「構<sub>二</sub>造姦惡<sub>一</sub>」の一句を削除へとさし向けたのであろう。

先の改変の例とは別に、とはいえ同じ対表現への志向が右の削除例にも働いていたことから、書紀において新たに付加されたその例が、

處<sub>二</sub>跌蓐之親<sub>一</sub>、  
當<sub>二</sub>藩屏之任<sub>一</sub>、

右のように対句を構成するのは自然と言う外ない。もつとも、この対句がなに故に付加されたのか、この問いには、さし当つて内容にかかわる要請によるとしか答えられない。同様に、

生民↓黎民 兆庶↓群庶 亭育↓饗育 置↓授 殘食↓殘虐 厭↓厭 鱸↓膾 濱↓賓 姦↓姦など



右に列挙した諸種の改変についても、対表現という見方では到底律しきれない。これらの中には、前後の文脈にかかわる内容上の要請による例もあるだろうし、また例えば「率土之濱」とある毛詩に基づく表現を改めて「率土之賓」とするこの改変が、次に挙例する隋書の書紀に利用されている一節にある「率土之人」に関連するかも知れないといった、あるいはまた、前に挙例した孝徳紀の「主不<sub>レ</sub>蔽也」が、その出典である原文に「主不<sub>レ</sub>蔽也」とあり、

〔俗漸蔽而不<sub>レ</sub>寤（繼体紀二十四年二月）〕

〔々々弊々々々（芸文類聚・治政部論政）〕

右のそれと逆の関係にある使用と無縁ではないかも知れないといった、さらには、

〔酷毒流<sub>ニ</sub>於民庶<sub>ニ</sub>（雄略紀二十三年七月）〕

〔々々々々人々（隋書・高祖紀下）〕

〔民無<sub>ニ</sub>徭役<sub>ニ</sub>（清寧紀二年十月）〕

〔人々々々（後漢書・明帝紀）〕

〔輒會<sub>ニ</sub>郡縣吏民<sub>ニ</sub>（持統紀六年三月）〕

〔々々々々人々（後漢書・章帝紀）〕

〔「民」への書紀における統一的な改変、あるいは逆に、〕

〔宇宙不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>君（繼体紀元年三月）〕

〔天地々々以無<sub>レ</sub>饗（芸文類聚・帝王部晋元帝）〕

〔廣大配<sub>ニ</sub>乎乾坤<sub>ニ</sub>（安閑紀元年十二月）〕

〔々々々々天地（芸文類聚・治政部論政）〕

「則二儀之陳區矣（天智紀元年十二月）」

「ク天地ククク焉（文選・西都賦）」

原文の「天地」からのその統一的な改変など、書紀全体の用字ないし表現の傾向の中で捉えなければならぬ例も少なくない。こうした諸種の要因から成る多様な異なりの、その全てに言及することは到底できない。以下には、従つて異なり一般についてではなく、そのうちことに對表現にかかわる例を取りあげる。

對象を限定するとは言え、異なり全体の中で對表現にかかわるものが占める割合は頗る大きい。隋書に基づく次の雄略紀の例でも、異なりには對表現への志向が大きくかわっている。

臣連伴造、每日朝參、國司郡司、隨時朝集。

何不<sub>レ</sub>罄竭<sub>ニ</sub>心府<sub>一</sub>、誠勅<sub>レ</sub>殷勤<sub>上</sub>。義乃君臣、情

兼<sub>ニ</sub>父子<sub>一</sub>。庶藉<sub>ニ</sub>臣連智力、内外歡心<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>

令<sub>下</sub>普天之下、永保<sub>中</sub>安樂<sub>上</sub>。不<sub>レ</sub>謂、遘疾彌留、

至<sub>ニ</sub>於大漸<sub>一</sub>。此乃、人生常分、何足<sub>ニ</sub>言及<sub>一</sub>。

但、朝野衣冠、未<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>鮮麗<sub>一</sub>、教化政刑、猶

未<sub>レ</sub>盡<sub>ニ</sub>善。興<sub>レ</sub>言念<sub>レ</sub>此、唯以留<sub>レ</sub>恨。今、年

踰<sub>ニ</sub>若干<sub>一</sub>、不<sub>ニ</sub>復稱<sub>レ</sub>天、筋力精神、一時勞竭。

如<sub>レ</sub>此之事、本非<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>身、止欲<sub>ニ</sub>安<sub>ニ</sub>養百姓<sub>一</sub>。

所以致<sub>レ</sub>此。人生子孫、誰不<sub>ニ</sub>屬念<sub>一</sub>。既爲<sub>ニ</sub>天

下<sub>一</sub>、事須<sub>ニ</sub>割<sub>レ</sub>情。今星川王、心懷<sub>ニ</sub>悖惡<sub>一</sub>、行

王公卿士、每日闕庭、刺史以下、三時朝集。

何嘗不<sub>レ</sub>罄竭<sub>ニ</sub>心府<sub>一</sub>、誠勅<sub>レ</sub>殷勤<sub>上</sub>。義乃君臣、

情兼<sub>ニ</sub>父子<sub>一</sub>。庶藉<sub>ニ</sub>百僚智力、萬國歡心<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>

令<sub>下</sub>率土之人、永得<sub>中</sub>安樂<sub>上</sub>。不<sub>レ</sub>謂、遘疾彌留、

至<sub>ニ</sub>於大漸<sub>一</sub>。此乃、人生常分、何足<sub>ニ</sub>言及<sub>一</sub>。

但、四海百姓、衣食不<sub>レ</sub>豐、教化政刑、猶未<sub>レ</sub>

盡<sub>ニ</sub>善。興<sub>レ</sub>言念<sub>レ</sub>此、唯以留<sub>レ</sub>恨。朕今、年踰<sub>ニ</sub>

六十<sub>一</sub>、不<sub>ニ</sub>復稱<sub>レ</sub>天、但筋力精神、一時勞竭。

如<sub>レ</sub>此之事、本非<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>身、止欲<sub>ニ</sub>安<sub>ニ</sub>養百姓<sub>一</sub>。

所以致<sub>レ</sub>此。人生子孫、誰不<sub>ニ</sub>愛念<sub>一</sub>。既爲<sub>ニ</sub>天

下<sub>一</sub>、事須<sub>ニ</sub>割<sub>レ</sub>情。勇及秀等、並懷<sub>ニ</sub>悖惡<sub>一</sub>、既

關<sub>レ</sub>友子<sub>一</sub>。古人有<sub>レ</sub>言、知<sub>レ</sub>臣莫<sub>レ</sub>若君、知<sub>レ</sub>子莫<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>父。縱使屋川得<sub>レ</sub>志、共治<sub>二</sub>國家<sub>一</sub>、必當下戮辱遍<sub>二</sub>於臣連<sub>一</sub>、酷毒流<sub>二</sub>於民庶<sub>一</sub>。夫惡子孫、已爲<sub>二</sub>百姓<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>憚、好子孫、足堪<sub>レ</sub>負<sub>二</sub>荷大業<sub>一</sub>。此雖<sub>二</sub>朕家事<sub>一</sub>、理不<sub>レ</sub>容<sub>レ</sub>隱。大連等、民部廣大、充<sub>二</sub>盈於國<sub>一</sub>。皇太子、地居<sub>二</sub>上嗣<sub>一</sub>、仁孝著聞。以其行業、堪<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>朕志<sub>一</sub>。以此、共治<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、朕雖<sub>二</sub>瞑目<sub>一</sub>、何所<sub>レ</sub>復恨<sub>一</sub>。(雄略紀二十三年八月条)

知<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>臣子之心<sub>一</sub>。所以廢黜。古人有<sub>レ</sub>言、知<sub>レ</sub>臣莫<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>於君<sub>一</sub>、知<sub>レ</sub>子莫<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>於父<sub>一</sub>。若令<sub>二</sub>勇秀得<sub>レ</sub>志、共治<sub>二</sub>家國<sub>一</sub>、必當下戮辱偏<sub>二</sub>於公卿<sub>一</sub>、酷毒流<sub>二</sub>於人庶<sub>一</sub>。今惡子孫、已爲<sub>二</sub>百姓<sub>一</sub>黜屏、好子孫、足堪<sub>レ</sub>負<sub>二</sub>荷大業<sub>一</sub>。此雖<sub>二</sub>朕家事<sub>一</sub>、理不<sub>レ</sub>容<sub>レ</sub>隱。前對<sub>二</sub>文武侍衛<sub>一</sub>、具已論述。皇太子廣、地居<sub>二</sub>上嗣<sub>一</sub>、仁孝著聞。以其行業、堪<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>朕志<sub>一</sub>。但令<sub>二</sub>内外羣官、同<sub>レ</sub>心戮<sub>レ</sub>力、以此、共治<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、朕雖<sub>二</sub>瞑目<sub>一</sub>、何所<sub>レ</sub>復恨<sub>一</sub>。(隋書・高祖紀下)

- (一) 臣連伴造、每日朝參  
國司郡司、隨時朝集  
(1) 王公卿士、每日闕庭  
刺史以下、三時朝集
- (二) 庶<sub>レ</sub>藉<sub>二</sub>臣連智力、内外歡心<sub>一</sub><sup>(10)</sup>  
(2) 庶<sub>レ</sub>藉<sub>二</sub>百僚智力、萬國歡心<sub>一</sub>  
(3) 四海百姓、衣食不<sub>レ</sub>豐、教化政刑、猶未<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>善
- (三) 朝野衣冠、未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>鮮麗<sub>一</sub>  
教化政刑、猶未<sub>レ</sub>盡<sub>レ</sub>善
- (四) 心懷<sub>二</sub>悖惡<sub>一</sub>  
行闕<sub>二</sub>友子<sub>一</sub>  
(4) 並懷<sub>二</sub>悖惡<sub>一</sub>、既知<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>臣子之心<sub>一</sub>、所以廢黜

(五) 大連等 民部廣大 (5) 前對文武侍衛、具己論述

充<sub>ニ</sub>盈於國<sub>一</sub>

右の(一)と(五)に明らかな通り、原文を改変するその書紀の志向は、いずれも対表現をめざしている。(一)のまず「臣連伴造」と「國司郡司」、あるいは「毎日」と「隨時」との対応、さらには、「宮庭」と同義である原文の「闕庭」は訓読をたてまゑとする書紀ではその品詞性において「朝集」と容易に対応し得ない、恐らくそれが理由で改変されたと考えられる「朝參」と、そして「朝集」との逐語的な対応など。(二)において原文の「百僚」を「臣連」に改めるのに関連して、それと対となるべく「萬國」を「内外」とし、(三)では、原文の内容上なお整然とした対とはみなし得ないその表現を改めて、「教化政刑、猶未盡善」により緊密な対応をもつ「朝野衣冠、未得鮮麗」とする。(四)は原文の一句をもとに、それと対となる句を新たに付加し、対的な性格のない原文を一転して対表現に改めている。(五)は、恐らく原文が既述の事柄にかかわる固有の内容をもつそのためであろうが、原文とは別の内容の文に一変させている。その「民部廣大、充<sub>ニ</sub>盈於國<sub>一</sub>」は対句ではない。が、前後とは別に、そこだけで意味的に相關する四字句二つが、それぞれに表現上は単位的に一つにまとまる四字句のまとまりとして、互に対的な關係にあることは疑いない。二句が相關するその性格から、以下にはこれを相關句と仮称するが、対句とは、二句が表現上の対応をもつか否かの差でしかない。句二つがその二つの句の限り対的に関連する点で、両者は一つに括り得るであろう。

ところで右の相關句は、原文とは別途に書紀において創案されたものであるが、これが、以下に続く別の相關句と、

大連等、民部廣大、充<sub>ニ</sub>盈於國<sub>一</sub>。

皇太子、地居<sup>ニ</sup>上嗣<sup>ニ</sup>、仁孝著聞。

内容の上でも類縁をもちつつ対応する関係にある。対表現のそれが一翼をになうべく意図されていることは明らかであろう。このことから、右に掲出した部分に続く「以<sup>テ</sup>其行業、堪<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>朕志<sup>ニ</sup>」の相関句に、さらに続く「但令<sup>ニ</sup>内外羣官同<sup>ニ</sup>心戮<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>」のその書紀における削除理由についても、対表現の構成のわくにそれが外れている点も考慮されて然るべきではあるまいか。前にそれと指摘した梁書の一句「構<sup>ニ</sup>造姦惡<sup>ニ</sup>」と、ちょうど同じ様に。

かくて、隋書を利用した雄略紀の用例についても、(一)(四)にみる原文を改変する場合はもとより、(四)の置換や、あるいは削除などの場合にも、そこに対表現への一貫した志向を捕捉できる。それは、次に挙げる梁書を利用した顕宗紀の一節においても同様である。

惟大王、首建<sup>ニ</sup>利遁<sup>ニ</sup>、聞<sup>レ</sup>之者歎息。彰顯<sup>ニ</sup>帝孫<sup>ニ</sup>、見<sup>レ</sup>之者殞涕。憫<sup>レ</sup>々摺紳、忻<sup>レ</sup>荷<sup>ニ</sup>戴<sup>ニ</sup>天之慶<sup>ニ</sup>。哀々黔首、悅<sup>レ</sup>逢<sup>ニ</sup>履<sup>ニ</sup>地之恩<sup>ニ</sup>。是以、克固<sup>ニ</sup>四維<sup>ニ</sup>、永隆<sup>ニ</sup>萬葉<sup>ニ</sup>。功隣<sup>ニ</sup>造物<sup>ニ</sup>、清猷映<sup>レ</sup>世。超哉邈矣、粵無<sup>ニ</sup>得而稱<sup>ニ</sup>。(顕宗即位前紀)

永平故事、聞<sup>レ</sup>之者歎息。司隸舊章、見<sup>レ</sup>之者隕涕。△甲▽。憫憫摺紳、重荷<sup>ニ</sup>戴<sup>ニ</sup>天之慶<sup>ニ</sup>。哀々黔首、復蒙<sup>ニ</sup>履<sup>ニ</sup>地之恩<sup>ニ</sup>。德踰<sup>ニ</sup>萬倍<sup>ニ</sup>、功隣<sup>ニ</sup>造物<sup>ニ</sup>。超哉邈矣、越無<sup>ニ</sup>得而言<sup>ニ</sup>焉。(梁書・武帝紀上)

右の例では原文が対句から成るその基本を踏襲しながらも、改変に際しては、やはり対表現への志向は著しい。

{首建<sup>ニ</sup>利遁<sup>ニ</sup>、聞<sup>レ</sup>之者歎息。  
彰顯<sup>ニ</sup>帝孫<sup>ニ</sup>、見<sup>レ</sup>之者隕涕。}

{功隣<sup>ニ</sup>造物<sup>ニ</sup>、  
清猷映<sup>レ</sup>世}

改変の比較的大きい右に摘記した二例のうち、上段の構成が逐語的な対応をもつ対表現であることは言うまでもな

い。下段の例では、改変によつて原文の対句が相関句となつてゐるが、原文において「功隣<sub>ニ</sub>造物<sub>一</sub>」と対句を構成する一方の「德<sub>ニ</sub>踰<sub>ニ</sub>嵩岱<sub>一</sub>」がその固有名詞の故に削除され、これに代つて梁書の引用部分の少し前（一句四字構成の句で十七句手前）に位置している「清猷映<sub>レ</sub>代」が利用されるこの利用は、対句の一方を欠いてそれを補充するための、従つて対表現をめざした措置に外ならない。

ところで梁書の引用文中の△甲▽には、「請<sub>ニ</sub>我民命<sub>一</sub>、還<sub>ニ</sub>之斗極<sub>一</sub>。」が該当し、書紀ではこれが削除されている。一方これとは逆に、書紀と対応する原文の該当箇所がない「克固<sub>ニ</sub>四維<sub>一</sub>、永隆<sub>ニ</sub>萬葉<sub>一</sub>。」（「克」を原文に「剋」と作る）が右に掲出した梁書の一節のすぐ後（四字句で四句ほど後）から引用、書紀において付加されている。削除・付加とそれぞれに形態を異にするとは言え、そうした措置の結果が、

首建 <sub>ニ</sub> 利遁 <sub>一</sub> 、聞 <sub>レ</sub> 之者歎息。	憫々拑紳、忻 <sub>レ</sub> 荷 <sub>ニ</sub> 戴 <sub>レ</sub> 天之慶 <sub>一</sub> 。
彰顯 <sub>ニ</sub> 帝孫 <sub>一</sub> 、見 <sub>レ</sub> 之者隕涕。	哀々黔首、悅 <sub>レ</sub> 逢 <sub>ニ</sub> 履 <sub>レ</sub> 地之恩 <sub>一</sub> 。
	是以、
	克固 <sub>ニ</sub> 四維 <sub>一</sub> 、永隆 <sub>ニ</sub> 萬葉 <sub>一</sub> 。
	功隣 <sub>ニ</sub> 造物 <sub>一</sub> 、清猷映 <sub>レ</sub> 世。

右のように連続した対応を成り立てていて、それらがいずれも対表現への志向に主導されていたことは疑いないであらう。

以上、魏志・梁書（王僧弁伝）・隋書・梁書（武帝紀）などを例に、その書紀と出典文との比較対照を通して、対表現への志向が深くかわつて原文との異なりを生じていたことを探り得たが、そのような用例は、自ら推測される通り、枚挙にいとまない。紙幅の許す限り多くの用例を挙げるために、以下には、便宜、該当する部分だけを引用し、それについて解説を加えるに留める。

〔漢書〕

(1) 乃封<sub>二</sub>秦重寶財物府庫<sub>一</sub>、還軍<sub>二</sub>霸上<sub>一</sub>。蕭何盡収<sub>二</sub>秦丞相府圖籍文書<sub>一</sub>。(漢書・高帝紀上)

↓封<sub>二</sub>重寶府庫<sub>一</sub>、収<sub>二</sub>圖籍文書<sub>一</sub>。(神功撰政前紀)

(2) 奉養甚謹、以<sub>二</sub>私錢<sub>一</sub>供給。(同・宣帝紀)

↓奉養甚謹、以<sub>二</sub>私供給<sub>一</sub>。(清寧紀二年十一月)

(3) 君子篤<sub>二</sub>於親<sub>一</sub>、則民興<sub>二</sub>於仁<sub>一</sub>。(同・平帝紀)

↓篤<sub>二</sub>於親族<sub>一</sub>、則民興<sub>二</sub>仁<sub>一</sub>。(顯宗即位前紀)

(4) 孝平之世、政自<sub>二</sub>葬出<sub>一</sub>。褒<sub>二</sub>善願<sub>一</sub>功、以自尊盛。(同・平帝紀)

↓褒<sub>二</sub>善願<sub>一</sub>功、酬<sub>二</sub>恩答<sub>一</sub>厚。(顯宗紀元年四月)

(5) 群臣皆伏固請。――臣等爲<sub>二</sub>宗廟社稷<sub>一</sub>計、不<sub>二</sub>敢忽<sub>一</sub>。願大王幸聽<sub>二</sub>臣等<sub>一</sub>。(同・文帝紀)

↓大伴大連、伏<sub>二</sub>地固請<sub>一</sub>。――臣等爲<sub>二</sub>宗廟社稷<sub>一</sub>計、不<sub>二</sub>敢忽<sub>一</sub>。幸藉<sub>二</sub>衆願<sub>一</sub>、乞垂<sub>二</sub>聽納<sub>一</sub>。(繼體紀元年二月)

(6) 間者、連年不<sub>レ</sub>収、四方咸困。元元之民、勞<sub>二</sub>於耕耘<sub>一</sub>、又亡<sub>二</sub>成功<sub>一</sub>、困<sub>二</sub>於饑饉<sub>一</sub>、亡<sub>二</sub>以相救<sub>一</sub>。(同・元帝紀)

↓間者、連年登穀、接<sub>二</sub>境無<sub>レ</sub>虞。元々蒼生、樂<sub>二</sub>於稼穡<sub>一</sub>。業々黔首、免<sub>二</sub>於飢饉<sub>一</sub>。(安閑紀二年正月)

(7) 農、天下之本也。黃金珠玉、飢不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>食、寒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>衣。(同・景帝紀)

↓食者、天下之本也。黃金萬貫、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>療<sub>二</sub>飢<sub>一</sub>。白玉千箱、何能救<sub>二</sub>冷<sub>一</sub>。(宣化紀元年五月)

右の各例について以下に解説するが、(1)の改変が整然とした対句にまどめていることは一見して明らかであろう。これに対して(2)(3)の場合、その原文からの改変は、まず(2)では後句の「錢」の削除が前句と同じ四字句に揃えるための、また(3)における前句の「族」の付加、後句の「於」の削除がいずれも四字句として揃えるための措置と考え

られ、兩者ともに、前句と後句との対応を考慮しての小稿にいう相関句をめざしたものに外ならない。(4)は原文の一句に基づき、それと類義的に対応する句を付加しての対句である。(5)のまず一つは、「群臣」を「大伴大連」と四字句にしたのと関連して後句に「地」を付加した(2)(3)同様の相関句、もう一つが原文を基に、それを類義的な句二つに引伸した対句である。後者の引伸例は、その改変の仕方において(4)と相通じる。原文の改変が対表現への志向にかかわる点は、(7)も全く同様であり、同じ内容を表わしても、原文より遙かに整った対表現に変える。一方(6)における改変は、その内容を原文とは全く逆にしたものである。裏返したその表現において、相関句と相互に逐語的に対応する二句ずつのまとまりとから成る整然とした対表現を構成するのである。

〔後漢書〕

(1) 遂令<sub>レ</sub>陛下龍<sub>ニ</sub>潛蕃國<sub>一</sub>、羣僚遠近、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>失望。天命有<sub>レ</sub>常、北郷不<sub>レ</sub>永、漢德盛明、福祚孔章。(後漢書・孝順帝紀)

↓遂令<sub>ニ</sub>金銀蕃國<sub>一</sub>、群僚遠近、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>失望。天命有<sub>レ</sub>屬、皇太子推讓、聖德彌盛、福祚孔章。(顯宗紀元年正月)

(2) 諸將既經<sub>ニ</sub>果捷<sub>一</sub>、膽氣益壯、無<sub>レ</sub>不<sub>ニ</sub>當<sub>レ</sub>百。(同・光武帝紀上)

↓生磐宿禰、進軍逆擊、膽氣益壯。所<sub>レ</sub>向皆破、以<sub>レ</sub>一當<sub>レ</sub>百。(顯宗紀三年是歲)

(3) 故吏稱<sub>ニ</sub>其官<sub>一</sub>、民安<sub>ニ</sub>其業<sub>一</sub>。遠近肅服、戶口滋殖焉。(同・孝明帝紀) 昔歲五穀登衍、今茲蠶麥善収。其大赦<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>。(同上)

↓百姓言、是時、國中無<sub>レ</sub>事、吏稱<sub>ニ</sub>其官<sub>一</sub>。海內歸<sub>レ</sub>仁、民安<sub>ニ</sub>其業<sub>一</sub>。是歲、五穀登衍、蠶麥善収。遠近清平、戶口滋殖焉。(仁賢紀八年十月)



(4) 戰慄恐懼、夫何言哉。〉(其令<sub>二</sub>有司各修<sub>三</sub>職任<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>遵法度<sub>一</sub>、惠<sub>中</sub>茲元元<sub>上</sub>)。(同・光武帝紀下)

↓彌勤彌謹、戰々競々、修<sub>二</sub>其職任<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>遵法度<sub>一</sub>者、天朝復益廣慈耳。(持統紀三年五月)

(1) は、恐らく原文「陛下龍<sub>二</sub>潛蕃國<sub>一</sub>」が内容の上で書紀の意図にそぐわないために、これを、その「蕃國」を生かし、「群僚遠近」に対応してしかもその対応が相互に逆構成となるように「金銀蕃國」と改め、またさらに、「福祚孔章」との対応上「盛明」を「彌盛」に改めて、それぞれ二句が緊密な対応をもつ構成としたものである。(2)(3) は、ともに原文を引伸する方向に改変する。まず(2)では、原文の「膽氣益壯、無<sub>レ</sub>不當<sub>二</sub>百<sub>一</sub>」の二句をいづれも後句に用いて、それぞれ前句を付加し、前句後句でまとまる相関句二組に改める。一方(3)は、原文の対句「吏稱<sub>二</sub>其官<sub>一</sub>、民安<sub>二</sub>其業<sub>一</sub>」をいづれも後句として前句をそれぞれ付加したもので、その前句後句でまとまる相関句二つが整然とした対表現を成り立たせている。また「是歲」以下には二組の対句が続いているが、原文の対句を寄せ集めたその構成が互いに類似した内容の対句二組の対表現であることは明らかであろう。(4)における改変も、書紀に独自の内容とする程に著しい。けれども出典として利用されていることは疑いなく、その原文は、表現の基本としては四字句によるものの、句相互に対的にまとめられているとは認め難い。書紀では、それに基づいて、

彌勤彌謹、  
戰々競々、  
修<sub>二</sub>其職任<sub>一</sub>、  
奉<sub>二</sub>遵法度<sub>一</sub>者、

右の通り、あくまでも対的に表現を整えようとする。対表現への志向にそれがよることは言うまでもない。

### 〔三国志〕

(1) 刑法者、國家之所<sub>二</sub>貴重<sub>一</sub>、而私議之所<sub>二</sub>輕賤<sub>一</sub>。獄吏者、百姓之所<sub>二</sub>縣命<sub>一</sub>、而選用者之所<sub>二</sub>卑下<sub>一</sub>。(魏書・衛觐伝)

↓調賦使者、國家之所<sub>二</sub>貴重<sub>一</sub>、而私議之所<sub>二</sub>輕賤<sub>一</sub>。行李者、百姓之所<sub>レ</sub>縣命、而選用之所<sub>二</sub>卑下<sub>一</sub>。(欽明紀二十一年九月)

(2) 吾疾甚。以<sub>二</sub>後事<sub>一</sub>屬<sub>レ</sub>君。君其與<sub>レ</sub>爽輔<sub>二</sub>少子<sub>一</sub>。吾得<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>君、無<sub>レ</sub>所恨。(同・明帝紀)

↓朕疾甚。以<sub>二</sub>後事<sub>一</sub>屬<sub>レ</sub>汝。汝、須<sub>レ</sub>打<sub>二</sub>新羅<sub>一</sub>、封<sub>二</sub>建任那<sub>一</sub>、更造<sub>二</sub>夫婦<sub>一</sub>、惟如<sub>中</sub>舊日<sub>上</sub>、死無<sub>レ</sub>恨之。(欽明紀三十二年四月)

(3) 易稱、損<sub>レ</sub>上益<sub>レ</sub>下、節以<sub>二</sub>制度<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>傷財、不<sub>レ</sub>害民。方今、百姓不<sub>レ</sub>足。而御府多作<sub>二</sub>金銀雜物<sub>一</sub>、<sub>レ</sub>銷冶以供<sub>二</sub>軍用<sub>一</sub>。(同・三少帝紀)

↓易曰、損<sub>レ</sub>上益<sub>レ</sub>下、節以<sub>二</sub>制度<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>傷財、不<sub>レ</sub>害民。方今、百姓猶乏。而有<sub>レ</sub>勢者、分<sub>二</sub>割水陸<sub>一</sub>、以爲<sub>二</sub>私地<sub>一</sub>、實與百姓<sub>一</sub>、年索<sub>二</sub>其價<sub>一</sub>。(孝德紀・大化元年九月)

(4) 爲<sub>二</sub>棺槨<sub>一</sub>足<sub>二</sub>以朽骨<sub>一</sub>、衣衾足<sub>二</sub>以朽肉而已<sub>一</sub>。<sub>レ</sub>棺但漆<sub>二</sub>際會<sub>一</sub>三過、飯含無<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>珠玉<sub>一</sub>。(同・文帝紀)

↓棺槨足<sub>二</sub>以朽骨<sub>一</sub>、衣衾足<sub>二</sub>以朽突而已<sub>一</sub>。<sub>レ</sub>棺漆<sub>二</sub>際會<sub>一</sub>三過、飯含無<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>珠玉<sub>一</sub>。(孝德紀・大化二年三月)

(5) 山峻高而谿谷深隘、守易攻難。(同・劉曄伝)

↓山、峻高而谿隘、守易而攻難之故也。(天智紀元年十二月)

以上は魏志の例であるが、まず改変の少ない(1)(4)(5)をみるに、(1)は、原文の最後の句から「者」を削除して、「調賦使者」<sub>レ</sub>、而私議之」<sub>レ</sub>と「行李者」<sub>レ</sub>、而選用之」<sub>レ</sub>とのように句相互の対応をより緊密なものとする。また(4)の前出例では、原文の前句から「爲」を削除して「棺槨」を句頭に出し、後句の「衣衾」と対応する整然とした対句に改め、後出例においても、前句中の「但」を削除することによって六字句二つが相對する相關句に変える。一方(5)では、書紀の文は「今敵所<sub>二</sub>以不<sub>二</sub>妄來<sub>一</sub>者、州柔<sub>（都都岐山）</sub>設置山險、盡爲<sub>二</sub>防禦<sub>一</sub>。」に続くその山

の地形についての説明文であり、原文の対ならぬ構成を改めて、「峻高而谿隘、守易而攻難」と対句に揃える。いずれも小幅な改変に留まっているとは言え、むしろそれ故に、一字もゆるがせにしない対表現への細心な用意をそこに窺うことができるであろう。これらに對して、(2)(3)の改変は著しい。内容の上でも原文とはかなり違う結果となっているが、その書紀の文は、次のような構成である。

(2) 須打<sub>ニ</sub>新羅<sub>一</sub>、封<sub>ニ</sub>建任那<sub>一</sub>、  
更造<sub>ニ</sub>夫婦<sub>一</sub>、惟如<sub>ニ</sub>舊日<sub>一</sub>。

(3) 分<sub>ニ</sub>割水陸<sub>一</sub>、以爲<sub>ニ</sub>私地<sub>一</sub>、  
賣<sub>ニ</sub>與百姓<sub>一</sub>、年索<sub>ニ</sub>其價<sub>一</sub>。

(3)が相關句二つから成り、その内部で逐語的な対応をもつ対表現であることは説明を要しない。一方の(2)には、そうした緊密な対応は認め難い。けれども、これを日本古典文学大系本のように「汝、新羅を打ちて、任那を封し建つべし。更夫婦と造りて、惟舊日の如くならば、」と訓むべきではないであろう。書紀集解が「汝須<sub>下伐</sub>新羅<sub>一</sub>。封<sub>ニ</sub>建任那<sub>一</sub>。更造<sub>ニ</sub>夫婦<sub>一</sub>。惟如<sub>ニ</sub>舊日<sub>一</sub>。」と訓むその背後には、恐らく、この一節が対表現に成るという把握があつたに違いない。小稿の立場からそれは、対応する「新羅」と「任那」をそれぞれにかかえて四字ずつが對となり、これがさらに「更造」以下の相關句と対的な表現を構成していると敷衍できる。かくて、この(2)を含めて(1)～(5)のいずれも対表現を志向していることは疑いない。

(1) 於<sub>ニ</sub>安平之世<sub>一</sub>而刀劍不<sub>レ</sub>離<sub>ニ</sub>於身<sub>一</sub>、蓋君子之於<sub>ニ</sub>武備<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>以已<sub>一</sub>。況今處<sub>ニ</sub>身疆畔<sub>一</sub>、豺狼交接、而可<sub>ニ</sub>輕忽不<sub>レ</sub>思<sub>ニ</sub>變難<sub>一</sub>哉。〱宜<sub>ニ</sub>深警戒<sub>一</sub>、務崇<sub>ニ</sub>其大<sub>一</sub>、副<sub>ニ</sub>孤意<sub>一</sub>焉。(吳書・吳主伝)

↓今處<sup>二</sup>疆畔<sup>一</sup>、豺狼交接。而可<sup>レ</sup>輕忽不<sup>レ</sup>思<sup>二</sup>變難<sup>一</sup>哉。況復平安之世、刀劍不<sup>レ</sup>離<sup>二</sup>於身<sup>一</sup>。蓋君子之武備不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>以已<sup>一</sup>。宜<sup>二</sup>深<sup>二</sup>警戒<sup>一</sup>、務崇<sup>二</sup>斯令<sup>一</sup>。 (欽明紀二十三年七月)

(2) 夫天無<sup>二</sup>二日<sup>一</sup>、土無<sup>二</sup>二王<sup>一</sup>。王者不<sup>レ</sup>務<sup>二</sup>兼<sup>二</sup>并天下<sup>一</sup>、而欲<sup>レ</sup>垂<sup>二</sup>祚後世<sup>一</sup>、古今未<sup>二</sup>之有<sup>一</sup>也。 (同・諸葛伝)

↓天無<sup>二</sup>雙日<sup>一</sup>、國無<sup>二</sup>二王<sup>一</sup>。是故、兼<sup>二</sup>并天下<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>使<sup>二</sup>萬民<sup>一</sup>、唯天皇耳。 (孝徳紀・大化二年三月)

(1) において、書紀は、原文の語句に基づきながらも、その叙述順序を逆転させている。表現上対的な性格のあいまいな原文は、そうした措置と、あわせて多少の単語の付加あるいは削除を経て、右のように相關句を基にした、

{ 今處<sup>二</sup>疆畔<sup>一</sup>、  
豺狼交接。 } 況復平安之世、  
刀劍不<sup>レ</sup>離<sup>二</sup>於身<sup>一</sup>。  
而可<sup>レ</sup>輕忽不<sup>レ</sup>思<sup>二</sup>變難<sup>一</sup>哉。 } 宜<sup>二</sup>深<sup>二</sup>警戒<sup>一</sup>、  
蓋君子之武備不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>以已<sup>一</sup>。 } 務崇<sup>二</sup>斯令<sup>一</sup>。

対表現としてその構成を整える。(2)の「天」「國」の対句は借用によるが、それに続く文を、書紀では相關する二句がその内部で「天下」と「萬民」というように対応する対的な表現に改める。(1)(2)ともに、改変に対表現への志向がかかわる点で、既述の例になんら変わるところはない。

史書を出典にもつ例は、勿論右に留まらない。けれども書紀における利用が疑問視されている晋書の、まさに「疑わしい例」(小島先生前掲書356頁)でも、

○世作<sup>二</sup>保傳<sup>一</sup>、以輔<sup>二</sup>父皇家<sup>一</sup>。櫛<sup>レ</sup>風沐<sup>レ</sup>雨、周<sup>二</sup>旋征伐<sup>一</sup>、劬<sup>二</sup>勞王室<sup>一</sup>。 (晋書・文帝紀)

↓敬受<sup>二</sup>絲綸<sup>一</sup>、劬<sup>二</sup>勞陸海<sup>一</sup>、櫛<sup>レ</sup>風沐<sup>レ</sup>雨、藉<sup>二</sup>草班<sup>二</sup>荆者<sup>一</sup>、爲<sup>二</sup>愛<sup>二</sup>其子<sup>一</sup>令<sup>二</sup>紹<sup>二</sup>父業<sup>一</sup>也。 (欽明紀六年十一月) かりに「○印は一般によく用いられる句」(同上)にせよ、それを組み入れて対的に表現を整えようとする志向は覆うべくもない。

〔敬受ニ絲編一〕〔櫛風沐雨〕者、〔爲愛ニ其子一〕  
 〔劬勞陸海一〕〔藉草班荆〕〔令紹ニ父業一〕也。

かくて上述の確實に典故を特定できる例はもとより、右のような確實性の薄い例などにも共通する、漢籍を利用するに際して、そこに対表現への志向がかかわることを原則とみなし得るであろう。利用の仕方は、改変・付加・削除など極めて区別である。しかもそうした措置は、単語から文に至るまでの随所にこれを認めることができる。現象としてはまさに多様と言う外ないが、いずれも、一つの原則としてそこに対表現への志向がかかわっていたそのことから、その志向は史書の利用に際しての限定的なものでないことは自らに推測可能であろう。次には、文選を取りあげる。

## (二) 文 選

### 〔西京賦〕

○虞人掌焉(17b)。……縱ニ獵徒一、赴ニ長奔一(19a)。……白日未レ及レ移ニ其晷一、已彌ニ其什七八一(20a)。……陵ニ重巘一(21b)。……於是鳥獸殫(22a)。……息ニ行夫一、展ニ車馬一(22a)。……相ニ辛乎五柞之館一、旋憩ニ乎昆明之池一(22b)。(カッコ内の数字は芸文印書館印行の李善注本の丁数。a・bはその表・裏。以下も同じ。)

↓命ニ虞人縱獵。凌ニ重巘一、赴ニ長奔一。未レ及レ移影、彌ニ什七八一。每レ獵大獲、鳥獸將レ盡。遂旋憩ニ乎林泉一、相ニ辛乎敷澤一。息ニ行夫一、展ニ車馬一。(雄略紀二年十月)

書紀の述作者が利用した文選は李善注本であったとみられているが(小島先生前掲書393頁)、かりに芸文印書館印行のそのテキスト(宋淳熙本重雕都陽胡氏藏版)に従えば、実に一七葉から二二葉に及ぶ広汎な原文から、書紀は、

適宜選択してその文を構成しているのである。書紀において新たに付加された「每<sub>レ</sub>獵大獲」の一句を含め、全体の構成が対表現をめざしていることは、史書の例以上に著しい。それは、次のように二句の対応の連続によつて成り立っている。

凌 <sub>二</sub> 重嶺 <sub>一</sub> 、	未 <sub>レ</sub> 及 <sub>レ</sub> 移 <sub>レ</sub> 影、	每 <sub>レ</sub> 獵大獲、
赴 <sub>二</sub> 長奔 <sub>一</sub> 。	獮 <sub>二</sub> 什七八 <sub>一</sub> 。	鳥獸將 <sub>レ</sub> 盡。
		遂
		旋憩 <sub>二</sub> 乎林泉 <sub>一</sub> 、
		相 <sub>二</sub> 辛乎藪澤 <sub>一</sub> 。
		息 <sub>二</sub> 行人 <sub>一</sub> 、
		展 <sub>二</sub> 車馬 <sub>一</sub> 。

〔好色賦・神女賦・洛神賦〕

○天下之佳人、莫<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>楚國<sub>一</sub>（10 a 好色賦）。茂矣美矣、諸好備矣。盛矣麗矣、難<sub>二</sub>測究<sub>一</sub>矣。上古既無、世所<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>見。曄兮如<sub>レ</sub>華、溫乎如<sub>レ</sub>瑩（7 a 神女賦）。芳澤無<sub>レ</sub>加、鉛華弗<sub>レ</sub>御。……奇服曠世、骨像應<sub>レ</sub>圖（13 a 洛神賦）。

↓天下麗人、莫<sub>レ</sub>若<sub>二</sub>吾婦<sub>一</sub>。茂矣綽矣、諸好備矣。曄矣溫矣、諸相足矣。鉛花弗<sub>レ</sub>御、蘭澤無<sub>レ</sub>加。曠世罕<sub>レ</sub>儔、當時獨秀者也。（雄略紀七年是歲）

西京賦の利用に留まっていた前例に対して、右の例では、出典として三賦を利用する。けれども丁数が示す通り、それらの所在は互いに近く、出典利用の状況としては西京賦の場合と変らない。新たに付加された「諸相足矣」以下、また改変された語句も、次のようにいずれも整然とした対表現をめざしたものに外ならない。その結果においても、また西京賦と同様なのである。

天下麗人、	茂矣綽矣、諸好備矣。	鉛花弗 <sub>レ</sub> 御、	曠世罕 <sub>レ</sub> 儔、
莫 <sub>レ</sub> 若 <sub>二</sub> 吾婦 <sub>一</sub> 。	曄矣溫矣、諸相足矣。	蘭澤無 <sub>レ</sub> 加。	當時獨秀者也。

〔緒白馬賦〕

○服御順<sup>レ</sup>志、馳驟合<sup>レ</sup>度。……襲養兼<sup>レ</sup>年（2 a）。……異體峯生、殊相逸發。超擡絕<sup>二</sup>夫塵轍<sup>一</sup>、驅驚迅<sup>二</sup>於滅没<sup>一</sup>。

（4 a）。……欽聳擢以鴻驚、時濩略而龍翥（5 a）。……睨<sup>レ</sup>影高鳴、將<sup>レ</sup>超<sup>二</sup>中折<sup>一</sup>。……別<sup>レ</sup>輩超<sup>レ</sup>群（5 b）。

↓其馬、時濩略而龍翥、欽聳擢而鴻驚。異體<sup>レ</sup>蓬生、殊相逸發。……赤駿、超擡絕<sup>二</sup>於埃塵<sup>一</sup>、驅驚迅<sup>二</sup>於滅没<sup>一</sup>。

（雄略紀九年七月）

↓睨<sup>レ</sup>影高鳴、輕超<sup>二</sup>母脊<sup>一</sup>。就而買取、襲養兼<sup>レ</sup>年。及<sup>レ</sup>壯、鴻驚龍翥、別<sup>レ</sup>輩越<sup>レ</sup>群。服御隨<sup>レ</sup>心、馳驟合<sup>レ</sup>度。（欽

明紀七年七月）

右の例では、同じ緒白馬賦のしかも近接した箇所を、雄略紀（―線）と欽明紀（〵線）とが互いに分ちあうように利用している。雄略紀のその文は、原文「絶<sup>二</sup>夫塵轍<sup>一</sup>」を、「迅<sup>二</sup>於滅没<sup>一</sup>」とより緊密な対応をもつ「絶<sup>二</sup>於埃塵<sup>一</sup>」とし、他は原文の叙述順序を多少改めたに過ぎない。一方、欽明紀の文は、そのような組替えと共に、「就而買取」を付加するなどして、改変の跡は雄略紀に較べて著しい。とは言え、両紀ともに、対表現に基づく原文を襲用ないし改変するその方向が、原文と同様、あるいはそれ以上に整然とした対表現をめざしている点で一致した性格をもつ。

〔西都賦〕

（1）帶以<sup>二</sup>洪河涇渭之川<sup>一</sup>。衆流之隈、汧涌<sup>二</sup>其西<sup>一</sup>。華實之毛、則九州之上腴焉。防禦之阻、則天地之隩區焉（4 a）

・ b）。……衣食之源、……決<sup>二</sup>渠降<sup>レ</sup>雨（7 b）。……繚以<sup>二</sup>周牆<sup>一</sup>（8 b）。

↓西北帶以<sup>二</sup>古連旦涇之水<sup>一</sup>、東南據<sup>二</sup>深泥巨堰之防<sup>一</sup>。繚以<sup>二</sup>周田<sup>一</sup>、決<sup>二</sup>渠降<sup>レ</sup>雨。華實之毛、則三韓之上腴焉。衣

食之源、則二儀之隕區矣。(天智紀元年十二月)

(2) 史記曰、韓聞<sub>ニ</sub>秦之好<sub>レ</sub>興<sub>レ</sub>事、欲<sub>ニ</sub>罷<sub>レ</sub>无<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>東伐<sub>ニ</sub>、廼使<sub>ニ</sub>水工鄭國<sub>ニ</sub>間説<sub>レ</sub>秦、令<sub>ニ</sub>下鑿<sub>ニ</sub>涇水<sub>ニ</sub>、自<sub>ニ</sub>中山<sub>ニ</sub>西<sub>ニ</sub>、抵<sub>ニ</sub>瓠口<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>渠。並<sub>ニ</sub>北山<sub>ニ</sub>、東注<sub>ニ</sub>洛、溉<sub>ニ</sub>烏鹵之地<sub>ニ</sub>、四万餘頃。收皆畝稅<sub>ニ</sub>一鍾、命曰<sub>ニ</sub>鄭國渠<sub>ニ</sub>。(李善注)

↓時好<sub>レ</sub>興<sub>レ</sub>事、廼使<sub>ニ</sub>水工穿<sub>レ</sub>渠。自<sub>ニ</sub>香山<sub>ニ</sub>西<sub>ニ</sub>、至<sub>ニ</sub>石上山<sub>ニ</sub>。以<sub>ニ</sub>舟二百隻<sub>ニ</sub>、載<sub>ニ</sub>石上山<sub>ニ</sub>。順<sub>レ</sub>流控引。於<sub>ニ</sub>宮東山<sub>ニ</sub>、累<sub>ニ</sub>石爲<sub>レ</sub>垣。時人謗曰<sub>ニ</sub>狂人渠<sub>ニ</sub>。損<sub>ニ</sub>費功夫<sub>ニ</sub>、三萬餘矣。損<sub>ニ</sub>費造<sub>レ</sub>垣功夫<sub>ニ</sub>、七萬餘矣。宮材爛矣、山椒埋矣。(齊明紀二年九月)

(1)は、従前の例と同様、選択的に原文が利用されている。対表現がそこに貫かれている点でも前例に共通する。たとえば「西北」と「東南」との対応、さらに「華實之毛」と「衣食之源」との対応など、いずれも原文を基にした、しかし原文にはない類義的な内容の対句から成る。それら二つの対句で前後をはさまれた「繚以<sub>ニ</sub>周田<sub>ニ</sub>、決<sub>ニ</sub>渠降<sub>レ</sub>雨<sub>ニ</sub>」は、相關する四字句二つがその四字句の限り対応して、そこにまとまりを成り立たせている。相關句としてのその性格は明らかであろう。一方、(2)は素材・内容ともに原文との関係は薄い。とは言え、圈点を付した箇所との両者の一致や三角点を付した部分における類似などから推して、原文との出典関係を疑う余地はない。その原文に對的な表現への志向は稀薄と言う外ない。書紀では、それとは對照的に、次のように全体の構成が対表現に基づいているのである。

時好 <sub>レ</sub> 興 <sub>レ</sub> 事、	自 <sub>ニ</sub> 香山 <sub>ニ</sub> 西 <sub>ニ</sub> 、	以 <sub>ニ</sub> 舟二百隻 <sub>ニ</sub> 、	順 <sub>レ</sub> 流控引。
廼使 <sub>ニ</sub> 水工穿 <sub>レ</sub> 渠。	至 <sub>ニ</sub> 石上山 <sub>ニ</sub> 、	載 <sub>ニ</sub> 石上山 <sub>ニ</sub> 、	於 <sub>ニ</sub> 宮東山 <sub>ニ</sub> 、
損 <sub>ニ</sub> 費功夫 <sub>ニ</sub> 、三萬餘矣。		宮材爛矣、	累 <sub>ニ</sub> 石爲 <sub>レ</sub> 垣。
損 <sub>ニ</sub> 費造 <sub>レ</sub> 垣功夫 <sub>ニ</sub> 、七萬餘矣。		山椒埋矣。	時人謗曰 <sub>ニ</sub> 狂人渠 <sub>ニ</sub> 。



右の例は、原文との関係が薄い。その薄さから、これを手懸りにして、漢籍を利用していない文もその表現や構成に対を強く志向していたのではないかといった類推は自らに可能であろう。（この点はなお70頁に詳述する）

ところで、文選の利用が比較的長文に及ぶ用例は賦に集中する傾向がある。これまで挙げた例は全てそれであつて、次の例はその傾向に外れるのであるが、改変に対表現への志向がかかわる点は変りない。

#### 〔冊魏公九錫文〕

○朕聞、先王並建<sub>二</sub>明德<sub>一</sub>、昨<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>土、分<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>民。崇<sub>二</sub>其寵章<sub>一</sub>、備<sub>二</sub>其禮物<sub>一</sub>、<sup>(12)</sup>

↓故、預選<sub>二</sub>明德<sub>一</sub>、立<sub>レ</sub>王爲<sub>レ</sub>貳。祚<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>嗣、授<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>民。崇<sub>二</sub>其寵章<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>於國<sub>一</sub>。（仁德即位前紀）

原文の「先王並建<sub>二</sub>明德<sub>一</sub>」は対応する句をもたない。以下に続く二組の対句に対しても、それは孤立的である。書紀では、その一句を少しく改変し、さらにこれと対となる「立<sub>レ</sub>王爲<sub>レ</sub>貳」を付加して相關句とする。以下に続く対句と相關句と並んで、対応する二句の対表現が三組連なるといった構成を形成するのである。

出典を文選に求めていると考えられる用例はなお尽きないが、他は概ね散発的であつて、長文に及ぶものはない。それらを考慮に入れても、文選を利用するに際して、対表現への志向がそこに大きくかわるといった原則は揺がない。それは史書の場合と全く同様である。自らに予想される同様のあらわれを、次には芸文類聚についてみる。

#### (三) 芸文類聚

#### 〔卷十三帝王部三・晋元帝〕

(1) (イ) 且宣皇之胤、唯有<sub>レ</sub>陛下<sub>二</sub>。億兆攸歸、曾無<sub>二</sub>與<sub>二</sub>。 (晋劉琨勸進元帝表)

(ロ) 咸見<sub>二</sub>翼戴<sub>一</sub>、以降<sub>二</sub>天威<sub>一</sub>。 (晋元帝答劉琨等令)

↓今億計天皇子、唯有<sub>二</sub>陛下<sub>一</sub>。億兆攸歸、曾無<sub>二</sub>與<sub>二</sub>。 又賴<sub>二</sub>皇天翼戴<sub>一</sub>、淨<sub>二</sub>除凶黨<sub>一</sub>。英略雄斷、以盛<sub>二</sub>天威天祿<sub>一</sub>。 (武烈即位前紀)

書紀の右に掲出した箇所の前後には、同じ芸文類聚を出典にもつ文がある。その前後の出典文では、固有名詞にかかわる改変以外にとりたてて指摘すべき点がないという理由から省略に従ったが、右に挙げた原文のことに(ロ)に対しては、大幅な改変が加えられている。それは、原文の前句後句の關係に基づき、その前句と後句とに内容の上で相關する句をそれぞれ新たに付加することによって二組の相關句とし、それが互に対応をもつ一組の対表現をめざしたものである。相關句の内部構成がそれぞれ六字句・四字句とその逆というようにふぞろいで、その限り変則性は否めない。けれども、既出の例では「損<sub>二</sub>費功夫<sub>一</sub>、三萬餘矣。損<sub>二</sub>費造<sub>レ</sub>垣功夫<sub>一</sub>、七萬餘矣。」(西都賦の李善注に基づく斉明紀の文)などに徴しても、句二つがその句中の字数において等しく対応しないといった、そうしたふぞろいを越えたところで対表現が成り立っていることは明らかであろう。相關句に限っても、対表現を成り立たせている二つの相關句の、それぞれその内部が六字句・四字句とふぞろいであっても、二句が相關する限り、そこに対的な表現への志向を認めることは可能であろう。そのことの具体は、なお次の例に一層顯著に指摘できる。

(2) 何悲之哀、何痛之酷。嗚呼我皇、逢<sub>二</sub>天之威<sub>一</sub>。嗚呼哀哉。眇然升遐。即安<sub>二</sub>玄室<sub>一</sub>。 (晋郭璞元皇帝哀策文)

↓豈圖、一旦眇然昇遐、與<sub>レ</sub>水無<sub>レ</sub>歸、即安<sub>二</sub>玄室<sub>一</sub>。何痛之酷、何悲之哀。 (欽明紀十六年二月)

書紀では、原文「眇然升遐」に対して、「一旦」とさらに「與<sub>レ</sub>水無<sub>レ</sub>歸」を付加する。その付加が六字句・四字句で内容上一つにまとまる相關句をめざしたものであることは疑いない。孤立的な原文とは対照的に、その相關句に

対表現への志向は著しい。

ところで、書紀の右に引用した箇所は、

意謂、永保<sub>ニ</sub>安寧<sub>ニ</sub>、統<sub>ニ</sub>領海西蕃國<sub>ニ</sub>、千年萬歲、奉<sub>レ</sub>事<sub>ニ</sub>天皇<sub>一</sub>。

に続き、これと対応する関係にある。この文中にも、「永保<sub>ニ</sub>安寧<sub>ニ</sub>、統<sub>ニ</sub>領海西蕃國<sub>ニ</sub>」という四字句・六字句が、続く四字句同志の相関句に先行してまとまりを構成している。これらの例に窺われるように、二句が四字句同志で相関句となるか、四字句・六字句で相関句を構成するか、そこに本質的な違いはない。字数の相異なる点で変則的だとは言え、それら上述の相関句が正しく対的な表現への志向から成り立っていることは、もはや贅言を要しない。(1)(2)ともに改変にそうした相関句をめざし、それを内にかかえて、(1)は緊密な、(2)はやや緩い、とは言えいずれも対表現を成り立たせているのである。

### 〔卷十六儲宮部・公主〕

○積善餘<sub>レ</sub>慶……………天道輔<sub>レ</sub>賢……………(晋潘岳南陽長公主誄)

↓天道輔<sub>レ</sub>仁、何乃虚説。積善餘<sub>レ</sub>慶、猶是光<sub>レ</sub>徴。(天智紀八年十月)

右の例について小島先生は暗記によるとお考えのようであるが(前掲書382頁)、先生も取りあげられている「積善鍾<sub>レ</sub>慶、祐徳輔<sub>レ</sub>仁」(晋左九嬪万年公主誄)が挙例した潘岳の誄に近接して収められていて、既述の通り、そうした近接箇所からの選択的な利用がしばしば書紀の出典をもつ文中に認められることに照して、書紀はそれを参照していたのではあるまいか。潘岳の誄から掲出した二句は、その間に長い文章を介在させていて、もとより対的な性格はない。書紀は、その二句を基に、そして恐らくは左九嬪の誄を参照した上で、それぞれに同じように批判的な

内容をもつ一句を付加して、相関句二つから成る対表現を成り立たせたものとみることができる。付加という点でも、対句（あるいは相関句）をそれぞれ前句ないし後句として、それと対応する句を新たに付加するなどの、既に指摘した類例がある。

〔卷二十四人部八・諫〕

○君饗<sub>レ</sub>國、德行未<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>衆<sub>一</sub>。而刑辟著<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>國<sub>一</sub>。嬰恐<sub>ニ</sub>其不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>莅<sub>レ</sub>國子<sub>レ</sub>民也<sub>一</sub>。（晏子）

↓陛下饗<sub>レ</sub>國、德行廣聞<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>天下<sub>一</sub>、而毀陵讎見<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>華裔<sub>一</sub>、億計恐<sub>ニ</sub>其不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>莅<sub>レ</sub>國子<sub>レ</sub>民也<sub>一</sub>。（顯宗紀二年八月）

德行廣聞<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>天下<sub>一</sub>  
 毀陵讎見<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>華裔<sub>一</sub>

対句の内部が逐語的に対応していることは明らかであって、これを、日本古典文学大系本で「陵を毀ち、讎りて華裔に見しめば」と訓むことは妥当でない。「見」は、書紀が原文の「見」を「聞」に改めたその「見」「聞」の対応を勘案しても、「あらはる」と訓まなければならない。「德行」には「毀陵」が、また「聞」に「見」がそれぞれ対応するその対表現への強固な志向を閑却してはならないであろう。

〔卷五十二治政部上・論政〕

(1) 凡人主所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>勸<sub>レ</sub>民者、官爵也。國之所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>興者、農戰也。（商君書）

↓凡人主之所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>勸<sub>レ</sub>民者、惟授<sub>レ</sub>官也。國之所<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>興者、惟賞<sub>レ</sub>功也。（顯宗紀元年四月）

(2) 天生<sub>二</sub>蒸民<sub>一</sub>、而樹<sub>二</sub>之君<sub>一</sub>。使<sub>レ</sub>司<sub>二</sub>牧之<sub>一</sub>、勿<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>其性<sub>一</sub>。(晋潘岳九品議)

↓ 天生<sub>二</sub>黎庶<sub>一</sub>、樹以<sub>二</sub>元首<sub>一</sub>。使<sub>レ</sub>司<sub>二</sub>助養<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>全<sub>二</sub>性命<sub>一</sub>。(繼世紀元年三月)

(3) (イ) 凡天下之所<sub>レ</sub>以不<sub>レ</sub>治者、常疾<sub>二</sub>世主承平之日久<sub>一</sub>。俗漸弊而不<sub>レ</sub>寤、政浸衰而不<sub>レ</sub>改。……(ロ) 海内清肅、天下謐如。嘉瑞並集、屢獲<sub>二</sub>豐年<sub>一</sub>。(後漢崔寔政論)

↓ (イ) 爰降<sub>二</sub>小泊瀬天皇之王天下<sub>一</sub>、幸承<sub>二</sub>前聖<sub>一</sub>、隆平日久。俗漸蔽而不<sub>レ</sub>寤、政浸衰而不<sub>レ</sub>改。……(ロ) 天下清泰、内外無<sub>レ</sub>虞。土地膏腴、穀稼有<sub>レ</sub>實。(繼世紀二十四年二月)

(4) 故有<sub>二</sub>大略<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>其所<sub>レ</sub>短、有<sub>二</sub>德厚<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>其小疵<sub>一</sub>。(新序)

↓ 有<sub>二</sub>大略<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>其所<sub>レ</sub>短。有<sub>二</sub>高才<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>其所<sub>レ</sub>失<sub>一</sub>。(繼世紀二十四年二月)

最初の(1)において、その原文は必ずしも厳密な対応をもつものではない。書紀は、それを、たとえば「所以」に統一させ、また「人主」「國」など句の主語にいずれも「之」を下接して、逐語的な対応をもつ全き対表現に改める。(2)も、改変の方向は(1)と同じ。原文の「蒸民」を「黎庶」に置き換えると共に、それと対応させるべく、「君」を「元首」に替えて四字句同志の相關句とする。以下に続く二句は、原文を大幅に改変して、

使<sub>レ</sub>司<sub>二</sub>助養<sub>一</sub>

令<sub>レ</sub>全<sub>二</sub>性命<sub>一</sub>

句の内部が逐一対応をもつ対句とする。そうした対句のさらに逐語的な対応を、(4)がより徹底させていることは一見して明らかであろう。

一方、(3)の場合には、掲出した箇所直前まで長文に渡って原文と書紀とが対応している。固有名詞を別にすればほぼ一致するそれらは、その類似ゆえに省いたが、異なりの少なくない挙例した箇所の、固有名詞に係る改変以

外の異なりには、いずれも対表現への志向がかわる。まず(1)における新たな「幸承<sub>三</sub>前聖<sub>二</sub>」の付加は、それが原文の「之」を削除して四字句とした「隆平日久」と対応すべく、その削除と共に相関句をめざした措置に外ならない。この部分に続く原文の対句は、書紀ではそのまま襲用されている。ところが(2)においては、原文のなお対的な性格の弱い四句に対して、書紀は、内容上その基本を踏襲しながらも、

〔天下清泰、(従って) 内外無<sub>レ</sub>虞

〔土地膏腴、(従って) 穀稼有<sub>レ</sub>實

右に明らかな通り、上下の句関係ばかりでなく、句の内部までが逐一对応する対表現に改める。それが強い対表現への志向にかかわることは言うまでもない。

〔卷五十九武部・(1)戦伐(2)将帥〕

(1) 嗟夫吳之小夷、負<sub>三</sub>川阻<sub>二</sub>而不<sub>レ</sub>廷。  
(魏楊脩出征賦)

↓ 嗟夫磐井、西戎之<sub>レ</sub>狡猾。負<sub>三</sub>川阻<sub>二</sub>而不<sub>レ</sub>廷、憑<sub>三</sub>山峻<sub>二</sub>而稱<sub>レ</sub>亂。  
(繼世紀二十一年八月)

(2) 良將之軍也、怒<sub>レ</sub>已治<sub>レ</sub>人、推<sub>レ</sub>惠施<sub>レ</sub>恩。士力日新。戰如<sub>三</sub>風發<sub>二</sub>、攻如<sub>三</sub>河決<sub>二</sub>。  
(黃石公三略)

↓ 良將之軍也、施<sub>レ</sub>恩推<sub>レ</sub>惠、怒<sub>レ</sub>已治<sub>レ</sub>人。攻如<sub>三</sub>河決<sub>二</sub>、戰如<sub>三</sub>風發<sub>二</sub>。  
(繼世紀二十一年八月)

(1)においては、原文の「負<sub>三</sub>川阻<sub>二</sub>而不<sub>レ</sub>廷」が孤立的であるのに対して、それと逐語的に対応する「憑<sub>三</sub>山峻<sub>二</sub>而稱<sub>レ</sub>亂」を新たに付加することによって、書紀は整然とした対句を成り立たせる。(2)では、そうした(1)とは逆に、原文から「士力日新」の一句が削除されている。主なその理由は、それが前後の対句の間にあって遊離的であるからに外ならない。削除によって、(2)も、逐語的な対応をもつ対句が二組正しく連続する構成に改まる。かくて、原文の

孤立的ないし遊離的な表現を回避するそうした付加や削除の、そのめざすところは、まぎれもなく対表現であつたと考えられるのである。

以上が芸文類聚の例である。全てを挙げ尽くしたわけではないが、出典の大勢は概ね右に尽きる。それらに共通して原文の利用に対表現への志向が大きくかわつていたことは、上述の史書・文選の場合となら変わらない。頻用されている史書以下の漢籍のその原文の一節を書紀が利用する際に、一般的な傾向として対表現が志向されていた、ということは、すでにその対表現への志向を出典利用における原則として把握することを可能にするはずである。利用の散発的な文献についても、書紀が利用するに際してのその原則のあらわれは、自らに期待されるであろう。最後に、それらを取りあげる。

#### (四) その他

##### 〔金光明最勝王經〕

(1) 已衰邁、老耄虛羸。要假扶<sub>レ</sub>策、方不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>進歩<sub>一</sub>。(卷九・除病品)

↓氣力衰邁、老耄虛羸。要假扶<sub>レ</sub>繩、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>進歩<sub>一</sub>。(顯宗紀二年九月)

(2) 見<sub>二</sub>大金鼓<sub>一</sub>、光明晃耀、猶如<sub>二</sub>日輪<sub>一</sub>。(卷二・夢見金鼓懺悔品) 身光照輝、如<sub>二</sub>金色<sub>一</sub>。……如<sub>二</sub>大梵響震雷音<sub>一</sub>。

(卷五・蓮華喻讚品)

↓泉郡茅渚海中、有<sub>二</sub>梵音震響若<sub>二</sub>雷聲<sub>一</sub>、光彩晃曜如<sub>二</sub>日色<sub>一</sub>。(欽明紀十四年五月)

金光明最勝王經は、仏典の類では唯一その利用が確認されている文献である(小島先生前掲書373頁)。先に散発的

な利用の文献を取りあげると前置きしたけれども、用例は少なくない。しかしまた、項目を立てる程の数でもなく、ここでは、便宜に従って、その主な用例を掲出するに留める。

まず(1)であるが、書紀の文は原文と殆んど変らない。「已」を「氣力」に替え、「方」を削除するといったその改変が、いずれも対応する二句を同字数の相關句にするための措置であることは明らかであろう。小幅な改変の(1)に対して、(2)は、原文との直接的な關係がたどり難い程に変える、というよりむしろ翻案に近い。書紀のその文を、日本古典文学大系本では「泉郡の茅葺海の中に梵音<sup>のりおと</sup>す。震響<sup>ひびき</sup>雷の聲の若し。光彩<sup>うきは</sup>しく晃<sup>て</sup>り曜<sup>かがや</sup>くこと日の色<sup>ひかり</sup>の如し。」と訓む。その訓みに対表現は考慮されていない。しかしながら、

有<sup>り</sup> 梵音<sup>のりおと</sup>、震響<sup>ひびき</sup>、若<sup>も</sup>雷聲<sup>かみなり</sup>一  
光彩<sup>うきは</sup>、晃曜<sup>かがや</sup>、如<sup>ごと</sup>日色<sup>ひかり</sup>一

右のように、それは聴覚と視覚との表現が逐語的に対応する対句として捉えなければならない。原文を選択的に利用し改変する方法において、文選の場合などすでに指摘した例と共通し、改変に対表現への志向が大きくかわる点でも一致した性格をもつ。

# 〔毛詩〕

○薄天之下、莫<sup>レ</sup>非<sup>二</sup>王土<sup>一</sup>。率土之濱、莫<sup>レ</sup>非<sup>二</sup>王臣<sup>一</sup>。(小雅・北山)

↓率土之下、莫<sup>レ</sup>匪<sup>二</sup>王封<sup>一</sup>。普天之上、莫<sup>レ</sup>匪<sup>二</sup>王域<sup>一</sup>。(安閑紀元年十二月)

北山の詩が対句であることは言うまでもない。書紀はその対句の基本を襲いながら、しかし、まずは土地を献上したというこれに先立つ文脈にあわせて「王臣」を削り、原文の「王土」を基に「王封」「王域」の対応を新たに作



る。類義的なその対応に恐らくかわるのであろうが、「溥天」「率土」にそれぞれ続く異義的な「下」と「濱」とに替えて、「下」「上」の対義的な対応とする。原文の対句は、それによって対義的な前句同志の対応と類義的な後句同志の対応とを基にした、内容の上でもより緊密な対応をもつ対表現にその表現を変えるのである。

### 〔春秋左氏伝〕

○又欲<sub>レ</sub>闕<sub>二</sub>翦我公室<sub>一</sub>、傾<sub>レ</sub>覆我社稷<sub>一</sub>、帥<sub>二</sub>我蜚賊<sub>一</sub>以來、蕩<sub>レ</sub>搖我邊疆<sub>一</sub>。<sup>(13)</sup>（成公十三年）

↓唐人、率<sub>二</sub>我蜚賊<sub>一</sub>以來、蕩<sub>レ</sub>搖我疆場<sub>一</sub>、覆<sub>二</sub>我社稷<sub>一</sub>、俘<sub>二</sub>我君臣<sub>一</sub>。（齊明紀六年十月）

原文において、「欲」は整然とした対句を対象にかかえている。書紀は、その中の一句から「傾」を削除して四字句に変え、また原文の対句の一方である「闕<sub>二</sub>翦我公室<sub>一</sub>」に替えて同じ四字句「俘<sub>二</sub>我君臣<sub>一</sub>」を新たに付加することによって、原文とは別の対句を作る。一方、それに先立つ二句は、原文の基本に従い、とは言え対的な性格のお稀薄な原文のその「以」を削除して、五字句同志の対表現に改めたものである。「唐人」以下、五字句・四字句同志がそれぞれ対的にまとまる対表現を一貫させるのである。

### 〔淮南子〕

○布<sub>レ</sub>德施<sub>レ</sub>惠、以振<sub>二</sub>困窮<sub>一</sub>、弔<sub>レ</sub>死問<sub>レ</sub>疾、以養<sub>二</sub>孤嫠<sub>一</sub>、百姓親附、政令流行。（卷十九・脩務訓）

↓布<sub>レ</sub>德施<sub>レ</sub>惠、政令流行。卹<sub>レ</sub>貧養<sub>レ</sub>嫠、天下親附。（顯宗即位前紀）

原文では、冒頭から以下四句目まで、二組の相關句が逐語的に対応する対表現を成り立たせている。内容の上でそれを受けて、以下にその帰結を表わす対句が続く構成である。書紀は、その関係を、相關句が二組対応する対表現

に変える。相関句内部は、いずれも前句が理由を、後句がその帰結をそれぞれ表わす。内容は原文の基本に従って類同しているけれども、その構成において、書紀は全体を対表現で一つにまとめているとみることが出来る。

〔劉向古列女伝〕

○(イ)収<sub>ニ</sub>倡優侏儒狎徒<sub>一</sub>、能爲<sub>ニ</sub>奇偉戲<sub>一</sub>者、聚<sub>ニ</sub>之于旁<sub>一</sub>、造<sub>ニ</sub>爛漫之樂<sub>一</sub>、日夜與<sub>ニ</sub>末喜及宮女<sub>一</sub>飲酒、無<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>休時<sub>一</sub>。  
(卷之七・孽嬖伝・夏桀末喜) (ロ)作<sub>ニ</sub>新淫之聲<sub>一</sub>、北鄙之舞、靡々之聲<sub>一</sub>。(同・殷紂姐己) (ハ)飲酒沈湎、倡

優在<sub>レ</sub>前、以<sub>レ</sub>夜繼<sub>レ</sub>晝。(同・周幽褒姒)

↓大進<sub>ニ</sub>侏儒倡優<sub>一</sub>、爲<sub>ニ</sub>爛漫之樂<sub>一</sub>、設<sub>ニ</sub>奇偉之戲<sub>一</sub>、縱<sub>ニ</sub>靡々之聲<sub>一</sub>。日夜常與<sub>ニ</sub>宮人<sub>一</sub>、沈<sub>ニ</sub>湎于酒<sub>一</sub>。(武烈紀八年

三月)

書紀の文は、原文の(イ)に基づいて、それに近接した位置にある(ロ)(ハ)の語句を選択的に取り込み、全く新しい対表現を成り立たせている。まず上段に例示するように、そのめざすところは、

大 進<sub>メテ</sub>侏儒倡優<sub>一</sub>、爲<sub>ニ</sub>爛漫之樂<sub>一</sub>、  
設<sub>ニ</sub>奇偉之戲<sub>一</sub>、縱<sub>ニ</sub>靡々之聲<sub>一</sub>。 日夜常與<sub>ニ</sub>宮人<sub>一</sub>、  
沈<sub>ニ</sub>湎于酒<sub>一</sub>。

相関句同志が互に対応する構成である。下段に掲出した「日夜」以下は、変則的な相関句とみられ、類例について既に閑説した通り、六字句と四字句とがそれぞれにまとまりながら相関する、その限り二句が対応するものと捉え得るであろう。上段の例は勿論、下段のそうした対的な構成も、表現を対的に整えようとしたその結果に外ならない。

出典と認められる用例は右に尽きるとは言えないが、それでも主なものは概ね挙例したとみて恐らく誤りない。始めに取りあげた史書以下、散発的に利用されている文献に至るまで、書紀が自らの表現にそれらの漢籍を利用するに際して、そこに対表現への志向が大きくかわるということを、一つの原則として捉えることができる。

そのかわりは各用例において実に区々であるが、原文のすでに対句としての構成を取るその一部に改変を加える程度のものから、原文に基づきながらも、書紀に独自な内容にいわば翻案に近いかたちで改変するものに至るまでの、それぞれを両極とする連続の中に、上述の用例は全て収斂される。広汎にわたるそうした連続を貫くものとして対表現があり、それが対句ないし相關句のいずれかのかたちを取って、あるいはそれらの部分のうちに顕現するのである。

対表現への志向は、改変に留まらず、漢籍の一節を選択し利用するその対象の選定それ自体にも深くかわる。一例を挙げるに、梁書に基づく前掲(47頁) 顕宗即位前紀の一節に続く次の文では、諸書から引用された句や文がいずれも対表現から成り立つものばかりなのである。

雖是曰兄、  
豈先處乎。

(云文類聚)  
非功而據、  
咎悔必至。

(後)  
吾聞、  
天皇不可<sub>レ</sub>以久曠、  
天命不可<sub>レ</sub>以謙拒、

大王、  
以社稷爲計、  
百姓爲心。

(云文類聚)  
發言慷慨、  
至于流涕。

天皇於是、  
知終不<sub>レ</sub>處、  
不逆<sub>二</sub>兄意<sub>一</sub>。

(云文類聚)  
乃聽而不<sub>レ</sub>即御座、  
世嘉其能以實讓。

曰、宜哉、  
兄弟怡々、  
篤於親族、  
天下歸德、  
則民興仁。

(云文類聚)  
れも卷二十八部  
武・後漢書は平  
帝紀。

右には「臣」を「吾」に、「帝王」を「天皇」になど原文を少しく改めた部分があるとはいへ、殆んど原文のまま襲用している点で、漢書の例以外は、上述の改変例のうちには取りあげていない。この顯宗即位前紀の例を含め、原文との一致ゆえに改変例としては拾いあげることができない少なからぬ用例において、原文が対表現の構成を一つの単位ないし基準として選択されていると認められる。勿論、改変例のことに原文からの引用が比較的短かい例には、同様の指摘が可能なものが少なくない。

かくて、漢籍を自らの表現に利用するに際して、対象の選定や改変などに対表現が一つの準拠としてあったとみることが出来る。もとより出典文といえども、書紀の一節として組み込まれ、他と融合して書紀の表現を成り立たせているのであるから、それらに限って対表現への志向が働いているというのではない。対表現への志向が表現の基調としてあったその基調が漢籍の利用を規定し、その結果として、原文が対表現の構成を一つの単位ないし基準として選択され、あるいは対表現をめぐる改変が加えられていたということになろう。右掲の顯宗即位前紀の一節は、その典型的な例とみなし得るのである。

#### 四

ところで、書紀三〇巻がいくつかのグループに分かれることは既に指摘されて久しい。それを扱った少なからぬ論考の驥尾に付して、かつて拙い小論を纏めた<sup>(19)</sup>が、上掲の諸例は、殆んどが旧稿に仮称したⅡ系列（巻一四～二一・二四～二七・三〇）に所属する。例外は、僅かに漢書(1)の神功紀（九）と文選の冊魏公九錫文によった仁徳紀（一一）との二例に過ぎない。しかも後者の仁徳紀の例は、文選利用例に一般に認められる原文以上に整然とした対表現をめざすその傾向に一部外れて、対表現への志向の低さをさえ露呈している。

系列間<sup>(15)</sup>（Ⅰ系列は卷六・一三・二二・二三）で大きく異なるこの用例数の多寡は、前章のまとめを系列の違いといった観点から改めて見直すべき必要を示唆するかの如くである。さらにまた、旧稿に指摘した系列区分の準拠が書紀の句法であり、従って表現形式という点でそれと無縁ではない対表現についても、ⅠⅡ系列の相違が自らに類推されて然るべきであろう。

試みにⅠⅡ系列にそれぞれ該当する用例を比較してみるに、漢書・高祖紀の一節がⅡ系列の継体紀（一七）とⅠ系列の仁德紀（一一）・允恭紀（一三）・舒明紀（二三）とに共に利用されていて、系列間で次のような相違が認められる。

○代王曰、奉<sub>二</sub>高帝宗廟<sub>一</sub>重事也。寡人不佞、不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以稱<sub>一</sub>。願<sub>二</sub>請<sub>一</sub>楚王<sub>二</sub>計<sub>一</sub>宜者<sub>一</sub>、寡人弗<sub>二</sub>敢當<sub>一</sub>。羣臣皆伏、固請。代王西鄉讓者三、南鄉讓者再。丞相平等皆曰、臣伏計之、大王奉<sub>二</sub>高祖宗廟<sub>一</sub>、最宜<sub>レ</sub>稱。雖<sub>二</sub>天下諸侯萬民<sub>一</sub>、皆以爲<sub>レ</sub>宜。臣等爲<sub>二</sub>宗廟社稷<sub>一</sub>計、不<sub>二</sub>敢忽<sub>一</sub>。願大王幸聽<sub>二</sub>臣等<sub>一</sub>。（漢書・高祖紀）

## Ⅱ系列

(イ)男大迹天皇謝曰、子<sub>レ</sub>民治<sub>レ</sub>國重事也。寡人不才、不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以稱<sub>一</sub>。願<sub>二</sub>請<sub>一</sub>、廻<sub>レ</sub>慮擇<sub>二</sub>賢者<sub>一</sub>、寡人不<sub>二</sub>敢當<sub>一</sub>。大伴大連、伏<sub>レ</sub>地固請。男大迹天皇、西向讓者三、南向讓者再。大伴大連等皆曰、臣伏計之、大王子<sub>レ</sub>民治<sub>レ</sub>國、最宜<sub>レ</sub>稱。臣等爲<sub>二</sub>宗廟社稷<sub>一</sub>計、不<sub>二</sub>敢忽<sub>一</sub>。幸藉<sub>二</sub>衆願<sub>一</sub>、乞垂<sub>二</sub>聽納<sub>一</sub>。（継体紀元年二月）

## Ⅰ系列

(ロ)亦奉<sub>二</sub>宗廟社稷<sub>一</sub>重事也。僕之不佞、不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以稱<sub>一</sub>。（仁德即位前紀）  
(ハ)雄朝津間稚子宿禰皇子曰、奉<sub>二</sub>宗廟社稷<sub>一</sub>重事也。寡人篤疾、不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以稱<sub>一</sub>。猶辭而不<sub>レ</sub>聽。於是、群臣皆固請曰、臣伏計之、大王奉<sub>二</sub>皇祖宗廟<sub>一</sub>、最宜<sub>レ</sub>稱。雖<sub>二</sub>天下萬民<sub>一</sub>、皆以爲<sub>レ</sub>宜。願大王聽之。（允恭即位前紀）

(二)則辭之曰、宗廟重事矣。寡人不賢、何敢當乎。群臣伏固請曰、(舒明紀元年正月)

I系列では、(㊦)(㊧)のいずれにおいても、対表現への志向はまさに稀薄と言う外ない。原文中の「寡人不佞、不足<sub>レ</sub>以稱<sub>二</sub>」は(㊦)(㊧)の全てが少しく改変しながら襲用しているが、この四字句同志の相關句を除けば、(㊦)に「猶辭而不<sub>レ</sub>聽」とあるのを、I系列における唯一の対的な表現の例として挙げ得るに留まる。

一方、II系列にあたる(㊦)から対的に表現されている語句を摘記すると、左の通り、その数はI系列の比ではない。

子 <sub>レ</sub> 民	寡人不才	廻 <sub>レ</sub> 慮擇 <sub>二</sub> 賢者 <sub>一</sub>	大伴大連	西向讓者三	大王子 <sub>レ</sub> 民治 <sub>レ</sub> 國、最宜 <sub>レ</sub> 稱
治 <sub>レ</sub> 國	不 <sub>レ</sub> 足 <sub>二</sub> 以稱 <sub>一</sub>	寡人不 <sub>二</sub> 敢當 <sub>一</sub>	伏 <sub>レ</sub> 地固請	南向讓者再	臣等爲 <sub>二</sub> 宗廟社稷 <sub>一</sub> 計、不 <sub>二</sub> 敢忽 <sub>一</sub>
幸 <sub>レ</sub> 藉 <sub>二</sub> 衆願 <sub>一</sub>	乞 <sub>レ</sub> 垂 <sub>二</sub> 聽納 <sub>一</sub>				

右には襲用例まで掲出したが、その「西向<sub>レ</sub>」「南向<sub>レ</sub>」の対句などは、対表現をめざすII系列のその志向のむしろ求めるものであったに違いない。また、原文の「羣臣皆伏固請」をI系列の(㊦)で「群臣皆固請」とし、あるいは(㊧)で「群臣伏固請」とするいずれの場合にも対的な表現への志向が皆無であるのに対して、II系列の(㊦)では、原文に「地」を付加して「大伴大連、伏<sub>レ</sub>地固請」と四字句のまとまりが互に対応する相關句に改めている。一方、原文「雖<sub>二</sub>天下諸侯萬民<sub>一</sub>、皆以爲<sub>レ</sub>宜」の削除についても、その主な理由は、前後する「大王<sub>レ</sub>」と「臣等<sub>レ</sub>」とを対応させる上で、それが遊離のないし來雜的であったからに外ならない。さらに原文の「願大王幸聽<sub>二</sub>臣等<sub>一</sub>」を「幸藉<sub>二</sub>衆願<sub>一</sub>、乞<sub>レ</sub>垂<sub>二</sub>聽納<sub>一</sub>」と対句に改める例を含め、かくして、逐語的な対応をもつ対句をはじめとして、同字数の語や句が相互に対的にまとまるものまで、そこに対表現への志向が一貫していることは明らかであろう。

たとえば「西向讓者三、南向讓者再」が漢書の襲用例であったように、あるいはまた、同じ状況を伝える(㊦)(㊧)

にそれが省略されていることが示す通り、西向讓云云が史実であるかは頗る疑わしい。と言う以上に、この例に限らず、一般に漢籍の利用は、表現を飾る、いわゆる文飾に主たる目的があつたと考えて誤りないであらう。文飾が典型的なかたちであられる駢儷体の文では、対句が表現上の特質である。Ⅱ系列においては、文飾のために漢籍に多く表現を借り、しかもその借用に当って、多くは、さらに文飾を目的として駢文流の対表現を志向しているのである。<sup>(16)</sup>この二重の装飾への志向は、遡源すれば、表現を飾ろうとする強い意図に帰一する。

明確な特質をもつこのⅡ系列に対して、Ⅰ系列は、数量ともに出典例が少ない。前に掲出したⅡがその最大の例であることに知られるように、漢籍の利用には消極的なのである。その利用に際して働く対表現への志向も、また、Ⅱ系列のそれに較べて遙かに微弱と言う外ない。Ⅱ系列の指摘になぜえれば、そうした消極性や微弱さは、表現を飾ろうとする意図の低さによると言い得るであらう。

右のⅠⅡ系列それぞれの性格は、漢籍の利用に関してだけ認められる限定的なものでは恐らくない。原文に基づく出典文と書紀独自の文とが分ち難く融合して書紀の表現を成り立たせている点においても、それぞれの性格は、ⅠⅡ系列各々の表現全般にわたるものとして捉えられるはずである。

表現において卓越した意図性を特質とするⅡ系列と意図性の稀薄なⅠ系列との、それぞれの性格は、かつて旧稿で「以」の使用状況を検討することから探り得たⅠⅡ系列それぞれの性格に重ね合わせることができる。Ⅱ系列でのその使用は、いずれも「以」の原則に基づくものであつて、そうした原則に忠実な使用が表現に意図的であつたⅡ系列のその特質のあらわれであることは明らかであらう。一方、Ⅰ系列でのその使用は「三句式を基準に、『以』使用の原則を外れるものから、さらに和文脈の混入を疑わせる例を含めて三句式のいずれにも該当しないものに至る軌跡、Ⅰ系列における『以』の複句は、その全てを描く。」<sup>(17)</sup>と言う様相を呈している。いわば放恣とも言えるそ

の使用に、表現における明確な意図は窺い得ないのである。

かくて、I-II系列それぞれの表現上の基調がさまざまなかたちを取ってあらわれていることは自ら予測される。その一つとして、次稿では、待遇表現を取りあげる。小稿は、それへの橋渡しとしての意味もあわせもつ。

# 〔注〕

(1) ちなみに、管子の本文は左の通り。

黄帝立明臺之議者、上觀於賢也。堯有衢室問者、下聽於人也。舜有告善之旌、而主不蔽也。禹立諫鼓於朝、而備訊咎、湯有總街之庭、以觀人誅也。武王有靈臺之復、而賢者進也。此古聖帝明王所以有而勿失、得而勿忘者也。(桓公問第五十六)

(2) 漢書・武五子(戾太子據)伝の「臣聞、子胥盡忠而忘其號」に顔師古は「忘、亡也。吳王殺之、被以惡名、失其善稱號」と注している。その注によれば、「忘」は「亡」であり、また「失」に通うこと明らかであるが、しかし「忘」の意義を「亡」を以って説明するところに注目しなければならない。その逆では勿論ない。

(3) 小稿に用いる句の内容は、国文法や中国文法に定義されているものとは異なる。

○一つの句とは統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の發表をいう。(山田孝雄『日本文法学概論』917頁)

○句は主語と述語又は主語、動詞、賓語、の配合であり、どの一を欠いても句は完整しない。(高横君平『漢語形体文法論』8頁)

○凡字相配而辭意已全者、曰「句」。(『馬氏文通校注』9頁)

○一個句子通常可以分爲兩大部份、前一部分爲「主題」(topic)、後一部分爲「解釋」(comment)。(周法高『中国古代語法』造句編(上) 1頁)周氏は、右の「句子」に注して、Leonard Bloomfieldの「sentence」についての説明(『Language』1933・171頁)の一節を挙げ、「在一段話中、前後有停頓可以獨立的成份、叫作「句子」と訳を付している。その例として「萬乘之國、弑其君者、必千乘之家。」を挙げ、それは「包含三個前後有停頓的成份、可是都不能獨立。『弑其君者、必千



乗之家。』雖然可以獨立、可是『萬乘之國』却不能獨立、牠必須和『弑其君者、必千乘之家。』合成一個句子。」という。

小稿に用いる句は、概ね右に周氏のいう「停頓の成份」に相当する。それは、表現ないし内容上の単位的なまとまりと規定することができる。便宜的な規定ではあるが、さしあたっての仮称として、以下に用いる。

- (4) 出典例は、概ね『小島憲之補注・書紀集解』・小島憲之著『上代日本文学と中国文学』上・日本古典文学大系本『日本書紀』上・下などにすでに取りあげられているものを用いる。

- (5) 諸本「彊」で一致するが、中華書局発行の梁書では「強」に作る。

- (6) 書紀集解(117頁)・上代日本文学と中国文学(43頁)・日本古典文学大系本(下112頁)いずれも「孰」に改める。けれども書紀の諸本は「熟」であって、「孰」に作るものは一本もない。思うに、この文頭の「豈」が当該部分を含めて文全体を対象としていることは明らかであって、一文中に「豈」「孰」が共存するとは考え難い。「熟」は、「十分に、じっと」などの意味で様々な動詞を修飾する。この意味で「じっと忍んで」と解釈しておく。

- (7) 書紀集解は「鉅」に(116頁)、日本古典文学大系本は「鉅」に(下111頁)それぞれ改め、上代日本文学と中国文学は「鉅」の可能性をお考えである(484頁)。しかし、諸本はいずれも「距」に作る。「鉅」あるいは「鉅」にしても、その訓みは「おほきなる」で一致しているが、そうした意味は「距」にも、淮南子・汜論訓に「魚釣のほり・釣針の爪距、あしおほなるもの者、あしおほなるもの舉遠」(高誘注「距、足、距、大也」とあるが、あるいは同じ淮南子・原道訓の「有鉤箴芒距、微縞芳餌」(高誘注「距、爪也」)の如き爪状の形態を言うのかも知れない。いずれにせよ、「距」を他に改めなければならない積極的な理由は認め難い。集解に指摘する「鉤爪鋸牙、自成鋒穎」(文選・呉都賦)の例が当該書紀の表現に酷似しているにせよ、それを改める根拠とすることはできないだろう。

- (8) この改変には、文選・広絶交論の「皆願摩頂至踵願腹胆抽腸」が参照されているかも知れない。そうだとすると、梁書の「頂」と「足」との対応に違和感を抱く故の改変であって、それが対表現への志向に根ざすものであることは疑いの余地がない。

- (9) この部分、日本古典文学大系本は、前田本・宮内庁本によって「儲君上嗣」とする。しかし「儲君」は他の諸本になく、古訓(集解も効之)に「上嗣」を「マウケノキミ」と訓む通り、「儲君」は不要なのであって、あるいは漢字で傍書してあった「上嗣」の訓みが本文に竄入したのではあるまいか。この部分が対表現を成り立たせていることは、本文の47頁参照。

- (10) この部分、書紀集解(83頁)・日本古典文学大系本ともに「庶はくは臣連の智力に藉りて、内外の心を歡びしめて、」と訓

むが、不自然さは逸れない。こども、

〔庶<sub>レ</sub>藉<sub>二</sub>臣連智力、内外歡心、  
欲<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>普天之下、永保<sub>二</sub>安樂<sub>一</sub>。〕

右のように緊密な対応をもつ対表現から成り立っていることは、これに前後するやはり対表現の構成に徴して疑いない。

(11) この一句については、文選・東都賦に「四海之内、更造<sub>二</sub>夫婦<sub>一</sub>」とあり、これによるか。

(12) 三国志・魏書の武帝紀に文選のこの部分と全く同じ文がある。けれども「選<sub>二</sub>明德<sub>一</sub>」が当該九錫文中の「分<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>民」に付された李善注「左氏傳曰、子魚曰、昔武王<sub>二</sub>選<sub>二</sub>建明德<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>蕃<sub>二</sub>屏周<sub>一</sub>」に一致することから、断定はされないが、出典は文選であったと推定されている（上代日本文学与中国文学 366頁）。

(13) この部分、日本古典文学大系本の頭注（317頁・一二）では「欲<sub>二</sub>闕<sub>二</sub>剪我公室<sub>一</sub>、傾<sub>二</sub>覆我社稷<sub>一</sub>、帥<sub>二</sub>我蕃賊<sub>一</sub>、以來<sub>二</sub>蕩<sub>二</sub>搖我辺境<sub>一</sub>」と訓む。小稿は、左伝会箋ならびに国訳漢文大成の訓みに従う。また大系本の「唐人率<sub>二</sub>我蕃賊<sub>一</sub>、來<sub>二</sub>蕩<sub>二</sub>搖我疆場<sub>一</sub>」という句の切り方も、小稿では採らない。

(14) 拙稿『日本書紀』の句法——「以」をめぐって——（国語国文・第四七卷第九号）

(15) 注14の拙稿に紹介した通り、Ⅰ系列の区分は諸説はば一致し、またⅠ系列に卷三〇五の諸卷を算入するのがこれまた一般的である。拙稿では、この三〇五はⅠ系列に組み入れたが、疑念なしとしない。系列区分は小稿の意図ではないので、しばらく三〇五を棚上げて論を進める。なお一・二は、ⅠⅠ系列の諸卷とは違う特色をもつ卷であるとの指摘があり、これまた除外しておく。けれども、この小稿で取りあげた対表現からみても、拙稿の区分を修正すべき点は勿論ない。

(16) 駢文流の対表現に基づく文飾の例は、書紀以外にも、たとえば常陸国風土記・茨城郡の記事などにその典型をみる事ができる。

夫此地者	〔芳菲嘉辰、 搖落涼候、〕	〔命 <sub>二</sub> 駕而向、 乘舟以游。〕	〔春則浦花千彩、 秋是岸葉百色。〕	〔聞 <sub>二</sub> 歌鶯於野頭 <sub>一</sub> 、 望 <sub>二</sub> 舞鶴於渚 <sub>一</sub> 。〕	〔社郎漁孺、 商豎農夫、 棹 <sub>二</sub> 舳舻 <sub>一</sub> 而往來。〕
況乎	〔三夏熱朝、 九陽煎夕、〕	〔嘯 <sub>レ</sub> 友、 率 <sub>レ</sub> 僕、〕	〔竝 <sub>二</sub> 坐濱曲、 驕 <sub>二</sub> 望海中 <sub>一</sub> 。〕	〔濤氣稍扇、 闕陰徐傾、〕	〔避 <sub>レ</sub> 暑者、 追 <sub>レ</sub> 涼者、 軫 <sub>二</sub> 鬱陶之意 <sub>一</sub> 。〕
					詠歌云、

こうした例からも、文飾が対表現と分ち難い深い関係にあったことは明らかであろう。

(17) 注14の拙稿。

(一九八〇・一一・三〇)